

消失点

作 吉水 恭子

プロローグ

リビングに見えるけれど、分断された生活空間。

その中に白い布を被った一つの人物大の「物」。

その前に、中年の女（梶原静香）が一人。

疲れた表情で立っている。

床には菓子パンの袋、おにぎりの包装などが散らばっている。

静香 「また、こんなものばかり食べさせて…。」

「物」を横目で見ては、目を逸らす。

苛立たしげに髪を掻き上げる。

そんなことを数回繰り返し、

静香 「ねえ。」

静香 「ねえ。」

返事はない。

静香、諦めた様にため息をつく。

静香 「ねえ。譲ってくれないかな。」

静香 「認めてくれないの、わかってるけど。」

静香 「ようやく来年一年生になるんだよ。まだ母親必要なんだって。食事の世話だつてちやんとできてないじゃない。」

静香 「翔太、おなかすいてるんじゃないの？」

静香 「今は意地張ってなんとかできて、そのうち絶対うまくいなくなる。」

静香 「私、あきらめないから。」

静香 「翔太には、私がランドセル買ってあげたいの。」

静香 「勝手なこと言ってるようだけど、私だってしょうがなかったの！」

静香 「裁判でも何でもやって、絶対取り返すから。」

静香、出ていく。

R市Pの古びた分譲マンション、フラワリー201号室のドアの外（回想エリア

A)

女がひとり、現れる。

根本幸（さち）。

「物」が動き出す。

白い布の下から現れたのは中年男。梶原。

梶原 「…よく言うよ。」

幸、扉のようなものの前に立つ。

ガムテープを取り出す。

黙々と扉たちに目張りをし出す。

梶原 「偉そうによお。」

梶原、文句を言いながら、身支度を整える。

梶原 「喰いもん、いつものところにあるから。」

支度をする梶原。

梶原 「行ってきます。」

署長 「これから、どうするの？」
梶原 「さあ。」
署長 「色々：あるだろ？」
梶原 「：まだ決めてません。」
署長 「まあ、そうだよな。」
梶原 「暑いつすね。」
署長 「まだ5月も始まったばかりなのにねえ。」

二人、黙る。

騒々しい足音。

田村、入ってくる。

手に資料を抱えている。

丁寧に机の上に置く。几帳面に揃える。

田村 「おはようございます。あれ、署長？珍しいつすね。」
署長 「おはよう。じゃ梶さん。」
梶原 「ええ。」

署長、梶原の肩をポンと叩く。

署長、出ていく。

田村 「おつかれさまでーす。」

田村、署長が居なくなったのを確認して、

田村 「え、え、なんすか。」
梶原 「なんだよ。」
田村 「署長。珍しくないすか。」
梶原 「そうか？」
田村 「なんすかなんすか。内緒の話すか？」
梶原 「関係ないだろ。」
田村 「えー、水臭いじゃないすか。コミュニケーション、取りましようよー。」
梶原 「うるせえ。」
田村 「冷たいなあ。」
梶原 「外はどうだ？」

田村 「ああ。まだまだだつすね。しばらく騒がれそうっす。」
梶原 「そうだな。」
田村 「でも、最近多いすね。虐待？」
梶原 「ああ。」
田村 「なんすかね。」
梶原 「さあな。」
田村 「興味ないんすか。」
梶原 「オレらの仕事はそこじゃねえだろ。」
田村 「ああ。まあ。」

梶原、田村が持ってきた資料を読み出す。

田村 「いや、でも参っちゃいますよ。ケイタ君。」
梶原 「は？」
田村 「ケイタ君すよ。朝礼で、ほら。聞いてなかったっしょ。梶さん。」
梶原 「まあ、あれだ。」
田村 「あれだ。じゃないすよ。もう。」
梶原 「で、なんだ？それ。」
田村 「オウムす。」
梶原 「おうむ？」
田村 「『ゴールデンウィーク毎年やるじゃないすか、一日署長。そのイベントと一緒にって、署で飼いだめたんすよ。オウム。マスコットにしたらしいす。』」
梶原 「へえ。」
田村 「なんか、署長が言葉教えてるみたいなんですけどー。」
梶原 「いいんじゃないの。署長も仕事ができて。」
田村 「いいんすか？そんな言い方しちゃって。」
梶原 「だってそうだろ。いちいちクチバシ突っ込まれちゃたまんねえって。」
田村 「お。うまいっすね。」
梶原 「…なんだよ。」
田村 「オウムだけにクチバシって。」
梶原 「…バカ。」
田村 「回ってくるみたいすよ、世話係。オレ、鳥アレルギーなんすよ。」
梶原 「ふーん。」
田村 「聞いてないでしょ、梶原さん、オレの話。」
梶原 「聞いてるよ。」
田村 「取りましようよー、コミュニケーション。」

梶原 「はいはい。」

田村 「もう。適当なんだから。」

梶原 「で。被疑者の様子は？」

田村 「落ち着いてるみたいですね。睡眠も食事も普通に摂ってます。」

梶原 「いい度胸だな。」

田村 「知ってたんですかね、子供、死んでること。」

梶原 「…ああ。」

田村、手元の資料を見る。

回想エリアAに幸が現れる。

現場マンションの共用廊下と思われる。

誰かを案内している幸。

たどり着いたドアはガムテープで頑丈に目張りしてある。

茫然とただそれを見ている幸。

ガムテープがはがされていく音。

勢いよく、ドアが開く音。

梶原 「ま。始めるか。」

田村 「連れて来ます。」

梶原 「頼む。」

田村、出ていく。

梶原、一人、部屋の中で、資料を捲る。

書類を手繰る手が止まる。

回想エリアBに静香が入ってくる。

梶原の回想。

静香 「母親、必要なんだって。」

梶原、書類を机に叩きつける。

静香が梶原をじっと見つめる。

取調室のドアを田村が開けている。

田村 「どうしたんすか、梶さん。」
梶原 「あ、いや。」

田村、入ってくる。
婦人警官佐々木が幸を連れている。

田村 「入って。」
佐々木 「どうぞ。」

幸、肯き、部屋の中に入ってくる。
梶原、幸を見つめる。
幸、毅然と梶原を見返している。

田村 「始めますよ。いいですか。」
梶原 「ああ。」

幸、梶原を見つめている。

田村 「じゃあ、そこに掛けて。」

幸、椅子に座る。
向かいの椅子に田村。取り調べを始める。

田村 「根本幸、三十二歳。間違いない？」
幸 「…はい。」

田村 「R市P4792フラワリー201。」
幸 「はい。」

田村 「昨夜はよく眠れた？」
幸 「はい。」

田村 「そうか。良かった。」
幸 「…はい。」

沈黙。

田村 「子供、なんて名前だっけ。」
幸 「美幸。」

田村 「そう。いくつだった。」

幸 「六才です。」

田村 「一年生？」

幸 「学校、行ってなかったから。」

梶原 「行かせてなかったんだろ。」

幸、梶原を見つめる。

幸 「…体、弱くて…。」

梶原 「それをあんたは置き去りにしたんだな。」

幸、梶原を睨みつける。

梶原 「違うのかい？」

幸 「いえ。」

梶原 「違うのかって聞いてんだ。」

幸 「…（小さな声で）置き去りにしました。」

梶原 「聞こえねえよ。」

幸 「置き去りにしました。」

梶原 「…そうだよな。」

幸 「はい。」

梶原 「…邪魔になったか。」

幸 「…はい？」

梶原 「子供、美幸ちゃんだっけ。」

幸 「邪魔ってどういう意味ですか？」

梶原 「こっちが聞いてんだよ。」

幸 「…。」

梶原 「邪魔だから見捨てて、殺したんだろ。」

幸 「違います。」

梶原 「何が？」

幸 「…殺してなんていません。」

梶原 「でも、死んだ。」

幸 「…。」

梶原 「あんたが鍵かけて出てった電気もガスも水道も止まった部屋で、暑くても窓も開けられなくて、で、死んだ。そうだよな？」

幸 「…。」

田村 「去年、今頃からすごく暑くなったよね。美幸ちゃん、極度の脱水症状だったって。」
幸 「…。」

梶原 「あんたが出ていく前に、もう随分弱ってたんだろうって医者も言ってる。」
幸 「…。」

梶原 「水道も止められてたんだよね？」
幸 「…はい。」

梶原 「何が違うっていうんだ。」
幸 「…。」

梶原 「あんたが見捨てて子供が死んだ。そうだろ？」
幸 「…。」

梶原 「それとも、死んだんじゃないかって、あんたが殺したか。」
幸 「違う。」

二人、睨み合う。

幸 「私、しょうがなくて…。」

梶原 「しょうがなく、窓も、ドアも丁寧にガムテープで目張りして出たっていうのかよ！」

怯える幸。

庇うように立ち上がる田村。

田村 「梶さん。進めます。」

梶原 「頼む。」

梶原、窓の方に行く。

田村 「美幸ちゃんだっけ。」

幸 「はい。」

田村 「遺体の解剖所見だと胃が空っぽだったって。」
幸 「…。」

田村 「最後にご飯あげたの、いつ？」
幸 「…覚えてません。」

田村 「美幸ちゃん、おなかすいたって言ってなかった？」
幸 「…さあ。」

梶原 「さあ？いいかげんなこと言ってんじゃないねえぞ。」

田村 「梶さん。」

幸 「…みゆと…随分話してなかったような気がします。」

田村 「そう。」

幸 「記憶がなんだか曖昧で…。」

田村 「なるほどねー。」

幸 「…。」

田村 「もう一度聞くとよ。最後に食事を与えたのはいつ？」

幸 「…よく覚えてません。」

梶原 「生きてたのか？」

幸 「え？」

梶原 「あなたが部屋を出ていったとき、ちゃんと美幸ちゃんは生きてたのかって聞いているんだ。」

回想エリアAに明かりが入る。

ガムテープの貼られたドアの中から

誰かの声「…ママ…。」

幸 「生きて…いたと思います…。みゆが生きてなかったら…出て行けるわけない…。」

梶原 「じゃあ、ほったらかしにして死なせることはできるんだな。」

田村 「梶さん、急ぎ過ぎです。」

幸 「…みゆを取られたくなくて…。」

田村 「誰に？」

幸 「…。」

梶原 「答えろ！誰にだよ！」

田村、梶原を押さえる。

田村 「部屋を出ていったのはいつ？」

幸 「…。」

田村 「それも思い出せない？」

幸 「…桜が咲いてたような気がします。」

田村 「そう。他に思い出せることない？」

幸 「他に？」

田村 「そう。他に。」

幸 「…ランドセル。」

幸、黙り込む。

田村 「ランドセルがどうしたの？」

幸 「ランドセル、新しいのを背負った子が…お母さんと歩いてて…」

田村 「(小声で) 入学式かもしれないですね。多分。近くの小学校当たります。」

梶原 「(小声で) 頼む。」

幸 「…羨ましいなって…。」

梶原 「羨ましい？」

幸 「(無邪気な美しい笑顔で) みゆにもあんなランドセル買ってあげたいなって。」

梶原、思わず机を叩く。

田村 「梶さん。」

田村、梶原を押さえる。

田村 「今日は、このあたりにおきましようか。まだ初日だし、疲れちゃうから。君、

頼む。」

佐々木 「はい。さ、こちらへ。」

幸、佐々木に付き添われ出ていく。

田村 「梶さん、ヤバいつすよ。近頃煩いんすから。」

梶原 「すまん。」

田村 「頼みます。」

田村、資料を手繰る。

田村 「問題は死亡時期、ですね。」

梶原 「そうだな。」

田村 「それと殺意の有無。」

精神鑑定。請求します？」

梶原 「必要ないだろ。」

田村 「そうかな。心神喪失、引つかかるんじゃないですかね。記憶も随分曖昧みたいだし。」

梶原 「うっせえんだよ。最近何でもかんでも心神喪失つてよ。そんなんでいつつも曖昧にされちまうじゃねえか。」

田村 「それはそうなんですけどね。」

梶原 「言い訳だろ、そんなの。」

田村 「梶さん、突っ込み過ぎです。じゃあ、報告、上げときます。」

梶原 「田村。」

田村 「わかってますよ。余計なことは書きません。」

梶原 「…すまん。」

田村 「お疲れ様です。」

梶原 「お疲れ。」

田村、出ていく。

梶原、一人ため息をつく。

梶原、疲れたように回想エリアBへ。

梶原の部屋。

上着を放り出し、横になり白布を被る梶原。

取調室に明かりがつき、いつの間にか幸が椅子に座っている。

幸 「隋分話してなかったような気がします。」

幸 「覚えていません。」

梶原の部屋にいつの間にか静香が立っている。

幸 「いつご飯あげたのか覚えていません。」

静香 「翔太、おなかすいてるんじゃないの？」

幸 「みゆにもあんなランドセル買ってあげたいなって。」

静香 「翔太には、私がランドセル買ってあげたいの。」

幸 「みゆを取られたらなくて。」

静香 「母親、必要なんだって。」

梶原 「やめろ！」

飛び起きる梶原。

取調室の明かりは消え、幸、静香はいなくなる。

梶原、飛び起きて奥にあるらしいキッチンスペースへ。

しばらくコメをとぐ音、水音、炊飯ジャーをセットする音などが響く。
やがて梶原また横になる。

2

五月三日

回想エリアB 「梶原の部屋」

目覚ましの音。

梶原、起き上がり、奥のキッチンに目をこすりながら向かう。

しばらく、炊飯ジャーの蓋が開いたり閉まったりする音、水音などが響き、

梶原 「飯、作ってあるから。」

上着を持って少し逃げるように階段を上る。

R警察署取調室。

椅子に体を投げ出す梶原。

署長が入ってくる。

手にホットコーヒーを持っている。

署長 「おはよう。」

梶原 「おはようっす。」

署長 「始まったね、ゴールデンウィーク。」

梶原 「道、混んでましたね。」

署長、片方のコップを梶原に渡し、もう一方にミルク、スティックシュガー二本

を入れる。

梶原、それをじっと見ている。

署長 「ブラックで良かったっけ？」

梶原 「ご馳走様です。」

二人、コーヒーを飲む間。

署長 「まだ張ってるよ。」

梶原 「ですわね。」

署長 「参るな。」

梶原 「いつものことじゃないすか。」

署長 「そうなんだけどね。」

梶原 「わかってますよ。突っ込み過ぎるんじゃないよ。」

梶原 「わかってますよ。」

二人、コーヒーを飲む。

煩い足音が近づいて来る。 田村。

田村、入ってくる。

田村 「あれ、署長。」

署長 「田村君、よろしくー！」

田村 「ういっす。」

署長、元気に去る。

田村 「相変わらず、声でかいっすね。」

梶原 「ああ。」

田村 「なんすかなんすか、署長。」

梶原 「心配なんじゃねえの。突っ込むなっけさ。…余計なこと言っただろ。」

田村 「あー。」

梶原 「まあ、そりゃあ言われて当然だわな。」

田村 「いやー、自分だって、黙ってるつもりだったんですよ。でも、昨日、署長が聞いてきて。」

梶原 「…わかった。」

田村 「すんません。」

梶原 「いいんだ。オレが悪い。」

田村 「同じ年くらいですもんね。翔太君。」

梶原 「…ああ。」

田村 「元氣すか。」

梶原 「まあな。」

田村 「そうだ！子供の日イベント、翔太君連れて来たらしいすよ。少年課が綿あめとかヨ
ーヨー釣りとかやるらしいし。ほら、ケイタ君もいるし。なんだったら、一緒に回
ったらいじやないすか。」

梶原 「えー、いいよ。」

田村 「翔太君喜びますって。」

梶原 「いいんだ。なんか苦手なんだよ。そういうの。」

田村 「…そうすか。出かけたたりしないんすか。」

梶原 「…ああ。何喋っていいかわかんねえンだよ、あいつと。」

田村 「そんなもんすか。」

梶原 「そんなもんだ。」

沈黙。

梶原 「そろそろ始めるか。」

田村 「呼んできます。」

田村、出て行く。

回想エリアBに静香。

二人が暮らしていた部屋。

幸せだった日。

子供を寝かしつけながら、洗濯物を畳んでいる静香。

梶原、部屋にどかどかと入ってきて、

梶原 「うおおおお。」

ドスンと座り、静香が畳んだ洗濯物をひっくり返してしまふ梶原。
それを平然と直しながらあきれたような、でも、愛おしそうな目で梶原を見てい
る。

静香 「また富山さんと喧嘩しちゃったの？」

梶原 「部長、頭固いんだって。」

静香 「そうだね。頑固だもんね、富山さん。」

梶原 「全く、現場の意見、少しは聞けって。」

静香 「ほらほらそんな大きな声出さないの。起きちゃうよ。」

どうやら子供が起きてしまったらしい。

慌てる梶原。

梶原 「あああ。」

静香 「(静香子供を抱き上げ) ほおら、大丈夫よ。悪いお父さんねえ。」

梶原 「ごめんよ。ほーらほら、怖くない怖くない。」

静香 「…ケンカ、すればいいじゃない。」

梶原 「え、いいの？」

静香 「だってね、私、あなたのそういうところが…。」

静香、愛おしそうに梶原を見る。

田村 「入って。」

静香、エリアBから消える。

佐々木が幸を連れてくる。

梶原が正面の椅子に掛ける。

梶原 「座って。」

幸、田村の方を見て、

幸 「この人じゃなきやダメなんですか？」

梶原、不機嫌な顔。

田村、梶原と幸を見比べて、

田村 「えっと…。」

梶原 「何偉そうに言ってるんだよ。自分が何したかわかってんのか！」

田村 「まあまあ。」

梶原、立ち上がり、田村に座れと顎で示す。
田村、幸、椅子に座る。

田村 「調子、どう？」

幸 「別に。」

田村 「そうか。眠れてる？」

幸 「はい。」

梶原 「夢…。」

幸 「え？」

梶原 「見ねえか、夢。信じ待った子供の夢、見ねえか。」

幸 「…別に。」

梶原 「そうか。よく眠れるよな。」

梶原、幸睨み合う。

田村、緊張を感じ、

田村 「部屋を出ていった頃の記憶がはっきりしないんだったね。」

幸 「はい。」

田村 「覚えているのはいつまでのこと？」

幸 「…。」

梶原 「母子家庭だったよな。」

幸 「…はい。」

田村 「そっか。じゃあ、大変だったでしょ。」

幸 「まあ、はい。」

梶原 「子供捨てといて何が大変だ。」

幸 「…！」

田村 「ちよっと梶さん！」

梶原 「ゴマンといるだろ、女手一つで育ててるうちも。」

田村 「そうですけど。」

幸 「私、学校もちゃんと出てなくて、だから…。」

梶原 「そんな奴だってゴマンといる。」

幸、梶原を睨む。

田村、あえて二人の視線に入る。

田村 「大変だったんだよね。」

幸 「…はい。」

梶原 「言い訳になるか、そんなこと。」

幸 「言い訳なんてしてません。」

田村 「(割り込むように) 離婚したのは…。」

幸 「三年前。」

梶原 「原因は？」

幸 「よくわかりません。」

梶原 「どっちの方から？」

幸 「…旦那から。みゆが生まれてから、少しずついろんなことがすれ違うようになって
いって…」

幸、回想エリアへ。

幸の自宅マンション。R市Pのフラワー201号室。

幸、優しく美幸に話しかけている。

幸 「上手にできたー？」

美幸 「ママ、これね、お花。ママにあげるね。」

幸 「うん。よくできたね。」

美幸 「ママは、何色が好き？」

幸 「そうだねー。ピンクかな。」

美幸 「ピンクー。あのねー、みゆもピンク好きー。ピンク、あるかな？」

幸 「そうだねー。ここかな。」

二人、折り紙の山の中から、ピンクの折り紙を探す。

美幸 「あったー。」

幸 「あったねー。」

二人笑いあう。

美幸 「ママ、みゆ、上手？」

幸 「そうね。上手上手。」

ドアの外に足音。

公平が帰ってきたようだ。

嬉しそうにドアを開け笑顔で出迎える幸。

幸 「おかえり。遅かったね。」

幸、美幸の姿を見て少し驚く公平。

公平 「なんだ、起きてたのか。」

幸 「うん。」

公平 「寝ててよかったのに。」

公平の鞆を大事そうに抱える幸。

公平、部屋に入る。

それについて歩く幸。

幸 「ご飯は？」

公平 「言ったじゃない、食べてくるって。」

幸 「そうだけど…。」

公平 「いいのに。」

幸 「お茶でも…。」

公平 「いいよ。」

幸、手の中の折り紙を公平に見せようと差し出す。

幸 「これね、今みゆが…。」

公平 「みゆ、寝かせないと。」

幸 「あ、うん。でも、パパに会いたいわって。」

公平 「生活リズム、ちゃんと整えた方がいいんじゃない？大事だろ、そういうの。」

幸 「ごめんなさい。すぐ寝かせる。」

公平 「本当に、ちゃんとしてくれないと。」

幸 「…。」

公平 「あ、ごめん。ちょっと言い過ぎた。」

幸 「あ、いいの。」

公平 「でも、いつまでたってもちゃんとしなの、本当、心配なんだよ。」

幸 「でも、まだ三つになったばかりだし。」

公平 「うちのは幼すぎるって母さんも言ってた。」

幸 「幼いってそんな…。」

公平 「もつとちゃんと自覚してくれないと。」

幸 「わたしのせい？」

公平 「いや、そうは言ってないけど。でも、昼間ずっと一緒にいるんだろ？」

幸 「それはそうだけど。」

公平 「躰は母親の責任に決まってるじゃないか。」

幸 「…。」

公平 「大体、父親なんてさ、実感もないんだから。」

幸 「え？」

公平 「あ、言い方、悪かったな。」

幸 「あ、うん。」

公平 「でも、美幸、僕に懐かないし。」

幸 「一緒にいる時間短いから。」

公平 「それにちつとも僕に似てない。」

幸 「そんなことないよ。目元なんか面影あるし。」

公平 「あ、もちろん気にしてないよ。でも、母さんもちよつとがっかりだつて。あ、もちろん冗談だよ。」

幸 「笑えないね。」

公平 「あー、なんか疲れた。先、横になるね。」

幸 「…おやすみなさい。」

公平、部屋を出ていった気配。

幸 「…みゆ、パパに似てないって。」

幸、しばらく、美幸の方を据わった眼で見ている。

幸 「おばあちゃんもそう言ったんだつて。」

幸、ゆつくりと取調室に戻ってくる。

幸 「離婚するまでみゆと二人きりで一日部屋に居ました。」

田村 「専業主婦だったんだもんね。」

幸 「はい。あの人がそう望んだので。すぐに美幸が生まれて。」

田村 「それからずっと？」

幸 「はい。躰は母親の仕事だからつて。美幸と二人きりで一日誰とも口を聞かない日もありました。」

梶原 「専業主婦なんてそんなもんだろ。」
幸 「そんなもんでどういう意味ですか？」
梶原 「いちいち突つかかんな。」
田村 「寂しかった？」
幸 「はい。」

回想エリアBに明かりが灯る。

梶原の家。

静香、まだ幼い翔太と二人。

足音、梶原が帰ってくる。

飛びつくようにドアを開く静香。

静香 「おかえり。」
梶原 「なんだ、待ってなくていいのに。」
静香 「ご飯食べる？」
梶原 「あーいい。寝る。くたびれた。」
静香 「そう。」
梶原 「なんだ、まだ翔太起きてたのか。」
静香 「あのね、今日翔太がね。」
梶原 「その話またでいいか。」
静香 「え、でも。」
梶原 「もう大変だったんだよ、今日。」
静香 「…そう。」
梶原 「お休み。」
静香 「…お休み。」

梶原、横になる。

梶原、寝入ってしまいそう。

その枕元で静香、じっと座っている。

静香 「私、今日一日、翔太としか話してないんだよ。」
梶原 「え、なに？」
静香 「何でもない。」

静香、寂しげに立ち上がり、出て行く。

しばらくして一人きりになった翔太、泣き出す。

起きる梶原。慌ててあやそうとするがやり方がわからない。

梶原 「翔太、翔太泣くな、ほら泣くな。ほーら、よしよし。」

梶原 「静香、どこ行ったんだ、静香！」

静香、飛び込んでくる。

梶原 「こんな時間にどこ行ってたんだ。翔太泣いてたぞ。」

静香 「ごめんなさい。ちよっとコンビニに。」

梶原 「全く。しっかりしてくれよ。」

静香 「ごめんなさい。」

梶原 「母親だろ？勘弁してくれよ、本当。」

静香、翔太を抱き上げ、去る。

梶原、取調室に戻る。

梶原 「寂しかったとか甘ったれたこと言うなよ。そんなの通用しねえぞ。母親だろうがよ！」

幸 「そんなこと言ったって寂しいに決まってるじゃないですか。美幸だって私だけで生んだんじゃない！」

梶原 「当たり前だろ、そんなこと。」

田村 「まあまあまあ、旦那さん、子供を引き取ろうって言いださなかったの？」

幸 「あの人、あの子のこと嫌いだったから。」

田村 「なんで？」

幸 「自分に似てないって。」

田村 「そんなこと旦那さんが言ったの？」

幸 「いえ。でも、きつと言えないだけです。私に。」

田村 「…。」

梶原 「子供は旦那の？」

幸 「どういう意味？」

梶原 「旦那の子かって…。」

逆上する幸。

幸 「当たり前でしょ！何言ってるの、あんたさつきから。」

田村 「梶さん。」

幸 「この人なんなんですか？」

田村、梶原に。

田村 「もう。梶さん、言い過ぎです。ちょっと黙っててください。」

梶原 「すまん。」

田村 「大丈夫？」

幸 「…はい。」

田村 「続けていいかな。」

幸 「…はい。」

田村 「梶さんも。いいですよね。」

梶原 「ああ。」

田村 「助けてくれる人はいなかったの？」

幸 「はい。」

田村 「お母さんは？」

幸 「誰のですか？」

田村 「あ、根本さんの。」

幸 「うち母子家庭で母は私が短大の時に再婚してそれから連絡も取っていません。」

田村 「そっか。ご近所に頼れる人はいなかったの？」

幸 「離婚してからは、近所付き合いも億劫になって。」

田村 「どうして？」

幸 「だって、他の人はうまくいってるんですよ、家庭。離婚なんて恥ずかしくて。」

田村 「そうか。」

幸 「だから、美幸だけはちゃんとしなくちゃって思ってた。でも、あの子なかなか出来な
いんですよ。」

田村 「どんなことが？」

幸 「なんか年より幼いし、何をやらせても不器用だし。だからだんだん人前に出すのも
恥ずかしくなって…。」

幸、落ち着かなくなってくる。

刑事二人顔を見合わせる。

幸 「あの…。面会の問い合わせって来てますか？」

田村 「え？」

幸 「私に会いたって問い合わせ、来てるはずなんですけど。」

田村、梶原を振り返る。

梶原、首をかしげる。

田村 「さあ。ちょっと聞いてないな。」

幸、急に落胆した不安げな素振り。

幸 「そんなはずない。会いに来てくれるって言ってたんで。」

顔を見合わせる田村、梶原。

田村 「あー、ちょっとこっちには連絡ないけど…。」

幸 「隠してるんじゃないんですか？」

田村 「いやいやいや。そんなこと—。」

幸 「絶対：絶対来てるはずなんです。」

田村 「わかった。ちょっと聞いてみるね。」

幸 「そしたら、すぐに会いたいで。」

田村 「わかった。」

幸、急に落ち着きを失う。

イライラと机を指先で叩く。髪を何度も掻き上げる。

田村、それを気にする素振り。

田村 「あの…。」

幸 「今日はもういいですか？」

幸、梶原を見て、

幸 「気分が悪いです。」

田村 「…わかった。」

梶原、不機嫌そうな顔。

田村 「いいですね。君。」

佐々木「はい。」

幸、田村、佐々木、出ていく。

梶原、足音が遠ざかるのを確認して、

梶原「くそ！」

梶原、パイプ椅子を蹴飛ばす。

ドアが開く。田村。

田村、パイプ椅子を戻しながら、

田村「物に当たるの良くないですよ。」

梶原「当たってねえよ。」

田村、パイプ椅子のゆがみを気にしながら、

梶原「なんで戻ったんだ。」

田村「何すかね。あれ。根本。明らかに様子が。」

梶原「ああ。」

田村「あのさっきの面会の相手って男すかね。居たって話じゃないすか。そこに住んでたんでしょ、根本。この一年間。」

梶原「そうらしいな。」

田村、資料を捲り、

田村「これっすね。神宮寺良徳、四十八歳。」

田村、資料を梶原に見せる。

梶原「ん。」

田村「名前、すごいすね。二人、恋人なんすかね？根本と神宮寺。」

梶原「さあな。ただ、一年だろ、一緒にいたの。他人じゃないわな。」

田村「ですな。」

田村、資料を読みつつ、

田村 「いつからなんすかね。」
梶原 「え？」

回想エリアBに明かり。

静香が俯いてじっと座っている。

梶原、顔色を変え、回想エリアBへ。

梶原 「…いつからだ。」

静香 「…。」

梶原 「なんか言え。」

静香 「…。」

梶原 「いつからだって聞いているんだ！」

静香 「…。」

梶原 「なんとか言えって。」

静香 「…。」

梶原 「黙ってたらなんにもわからないだろ。」

静香 「…ごめんなさい。」

梶原 「…んだよ、それ。」

静香 「ごめんなさい。」

梶原 「…謝るなよ。」

静香 「ごめんなさいごめんなさい。」

梶原 「謝るなって！」

梶原、思わず静香の頬を叩く。

梶原 「…謝られると認められた気になる…。」

沈黙。

静香 「…やめよう。」

梶原 「…え？」

静香 「わたしたち、もう、やめよう。」

静香、頬を押さえもせず、顔を上げ、部屋から出て行く。

梶原 「…なんだよ。いつからなんだよ。」

梶原、ゆっくりと取調室へ戻る。

梶原 「…気がつかなかったの、オレだけなのかよ。」

梶原 「…。」

田村 「なんすかなんすか、梶さん。」

梶原 「あ、ああ。」

田村 「大丈夫すか？」

梶原 「…。とにかく、そのなんだ。」

田村 「神宮寺すか。」

梶原 「あー、そいつ、そいつに話聞こう。任意で引っ張って来れねえか。」

田村 「ちよっと、やってみますか。」

梶原 「ああ。」

梶原、デスクに腰掛け、深くため息をつく。

田村、そんな梶原を何となく見て、

田村 「本当、大丈夫すか？」

梶原 「何が。」

田村 「なんか、昨日から様子おかしいす。」

梶原 「…。」

田村 「当たり前、きつすぎるんじゃないすか？根本に。」

梶原 「…なんだよ、文句あんのかよ。」

田村 「…。」

梶原 「文句あんならはつきり言えよ。」

田村 「…生意気言ってすんません。」

梶原 「…っつによ。」

田村 「…。」

梶原 「…腹立つんだよ。俺だって…一人で子育てくらいしてる！それをなんだ？自分ばかり悲劇のヒロインぶりやがって。」

沈黙。

田村 「なんかありました？翔太君と。」

梶原 「なんもねえよ。」

田村 「なら良かったっす。」

梶原 「…ろくに顔も見れてねえからな。」

田村、椅子に座る。

田村 「うまくいきませんか。翔太君と」。

梶原 「…どうやって接していいか、わかんなくてな。」

田村 「翔太君かわいくないんすか。」

梶原 「かわいいとかかわいくないとかそういうんじゃないか。そういう問題じゃねえんだ。そういう問題じゃねえんだよ。」

田村 「なに言ってるんすか、親子じゃないすか。」

梶原 「そう簡単なもんでもねえよ！」

足音、ノックの音。

田村、ドアを開ける。

署長。

田村 「どうしたんですか？」

署長 「終わったの？」

田村 「はい。」

署長 「首尾はどう？」

田村 「あんま良くないっすね。」

署長 「疲れてんじゃないの？」

梶原 「まあ。」

署長 「余計な口出しかもしれないけど、無理なんじゃないの？翔太君の世話。」

梶原 「…。」

署長 「やっぱり母親じゃないとできないこと、あるよ。」

田村 「そんなことないす。梶さん、頑張ってるじゃないすか。」

署長 「田村君？」

田村 「すいません。つい。」

梶原 「俺じゃ翔太を育てられないってことですか？」

署長 「いやー、別にそうは言っていないけど…。」

沈黙。

署長 「とにかく、心配なんだよ。わかるだろ？」

梶原 「…。」

署長 「一度、ちゃんと考えてみなよ。翔太君の気持ちも、さ。」

梶原 「…。」

署長 「じゃあ、田村君、あと頼んだよ。」

署長、去る。

梶原 「くそ！」

田村 「梶さん、自分も心配す。」

梶原 「心配？何がだよ！え？俺じゃ親失格だっていうのか！」

田村 「そんなこと誰も言ってます。心配だけです。梶さんと翔太君が。」

梶原 「それが余計だつて言ってるんだよ！」

田村 「…はい」

沈黙。

田村 「あ、そうだ。根本の旦那から返事ありました。明日、出頭するそうです。」

梶原 「…わかった…。」

田村 「報告書、上げときます。…あー、梶さん、無理、しないでくださいよ。お疲れつす。」

田村、出て行く。

独りになった梶原。書類に手を伸ばす。

それを机に放り出し、

梶原 「まったくどいつもこいつも！」

梶原 「…たまには早く帰るか。」

だるそうに腰を上げ、階段を下りる梶原。

回想エリアBへ。

白い布を見つける。

誰かが丸まってくるまっぴる気配。

梶原 「…ただいま。」

梶原 「ダメだろ、こんなところで寝てちゃ。」

梶原、キッチンエリアに向かう。

梶原 「おい。」

梶原、現れる。

梶原 「喰ってないじゃないか。」

梶原 「なんだよ。気に入らなかったのかよ。」

梶原 「せっかく作ったのに、気に入らなかったのかよ。」

梶原、だんだん興奮していく。

梶原 「こっちだって忙しいんだぞ。」

梶原 「わがままも大概にしろ！好き嫌いなんて十年早えンだよ！」

梶原、怒りが暴走して手が付けられない。

梶原 「大体、こんなところで寝てんじゃねえ！」

梶原、白布の下から、手荒く何かを引きずり出す。

梶原 「ほら、ほら！自分とここで寝ろ！」

梶原、ふと、相手の体温が高いことに気がつく。

梶原 「あれ、お前。」

梶原、何度も自分と相手の体温を比べる。

相手の体温が相当高いことに気づく。
慌てる梶原。

梶原、部屋の奥から体温計を持ってくる。

梶原 「だ、大丈夫か。」

梶原、すっかり取り乱している。

時計を見て、舌打ちしながら医者に電話する。

梶原 「もしもし、子供が熱を出して。え、休診日？そんな…じゃあどうしたら…。わわかりました…。」

また電話。

梶原 「もしもしあの子供が…！」

留守電だったらしい。

その間にも子供の額に手を当てたり、

梶原 「大丈夫か。」

様子を聞いたりする。

梶原 「…ふざけんな、医者がゴールデンウィークとか言って浮かれてんじゃねえよ！」

そんな風に電話に当たり散らしている梶原。

子供の様子が変わったことに気づく。

梶原 「翔太？どうした、翔太？」

子供の返事がない。

梶原 「翔太！」

救急車の音。

暗転。

五月四日

明るくなると取調室。

机の上に紙コップが三つ。

椅子に、田村、梶原。

向かい合って根本公平。下を向いたまま、たまに眼鏡を直す。

黙っている一同。

公平、ゆつくりと紙コップを取って、中の飲み物を口に含み、顔をしかめ、また机に置く。

梶原 「お忙しいところ、わざわざご足労いただきまして。」

公平 「こちらこそ、ご面倒を。」

公平、二人に深々と頭を下げる。

田村、梶原も、頭を下げる。

梶原 「…ご愁傷様です。」

公平 「…。」

公平、ゆつくりと頭を上げる。

公平、眼鏡を直す。その仕草は涙を隠しているようにも見える。

梶原 「遺体とは。」

公平、ハンカチを出し、口を覆い、何回か忙しなく頷く。

梶原 「そうですか。」

公平 「美幸は…。美幸は、何で死んだんですか？」

梶原 「…。」

公平 「病死ですか？それとも…。」

梶原 「まだ何とも。」

公平 「…まさか…幸が…。」

田村 「根本さん、捜査中ですから。」

公平 「そうだ。…そうですね。」

公平、コップを口に運ぶ。
手が小刻みに震えている。

公平 「幸は、元気ですか？」

梶原 「まあ。」

公平 「そうですか…。」

梶原 「娘さんと…美幸さんと最後に会われたのは…。」

公平 「三年前、離婚してから、ほとんど…。」

梶原 「そうでしたか。」

公平、コップを手に取り、何度も手の中で回す。

公平 「…冷たいと、お思いでしょうね。」

梶原 「…まあ。」

公平、紙コップの液体を見つめる。

公平 「こんなことを言っても、今更と思われるでしょうが。」

梶原 「…。」

公平 「美幸のことを忘れたことは一日だってありません。」

梶原 「でも、会おうとはしなかった。」

公平 「それは…。」

梶原 「母親の根本ひとりに任せっきりにしていた。」

公平 「…。」

梶原 「違いますか？」

公平 「結果的にはそうかもしれませんが。…ちょっと事情があつて…。」

梶原 「事情、どんな？」

公平 「…情けないことですが、母がとても体面を気にするもので。」

梶原 「体面。」

公平 「ええ。」

梶原 「体面ねえ。そんなものが子供より大事ですか？」

公平 「…そういう訳では無いのですが…。母は何かと難しい人間で…。それに私も仕事で…。わかつていただいていると思えますが、幸とは離婚が正式に成立しているんです。手を出せることと出せないことがある。」

梶原 「でも、あんたの子供であることに変わりはないと思えますがね。」

公平 「な、なんですか。なにか、文句が？」
梶原 「いえ、別に。」

梶原、コップを部屋の屑籠に投げる。入らないが意に介さず。

梶原 「続けて。」

公平 「美幸とは、離婚してからは、ほとんど会ってませんしね。」

梶原 「お父さん…なんですよ。」

公平 「え？」

梶原 「被害者の、美幸ちゃんの、お父さん、なんですよ？」

公平 「…だから、離婚が…。」

田村 「失礼ですけど、離婚はどちらが？」

公平 「それは…。私の方から。」

田村 「経緯をお聞かせいただけますか？」

公平 「なんていうか、つり合いが取れなかったんですよ。母も最初から反対してましたしね。」

田村 「はあ。」

公平 「やっぱり、教養っていうのかな。そういうのがないと。」

田村 「はあ。」

公平 「彼女、毎晩私の帰りを待ってるんですよ。しかも子供と一緒に。信じられますか？パパに会わせなかったとか言っちゃって。子供にだっていいわけないじゃないですか。本当、自立心が無いっていうか、母親としての自覚が無いっていうか。」

梶原 「じゃあ、あなたにはあったのか。」

公平 「は？」

梶原 「あなたには親としての自覚があったのかって聞いてんだよ！あなたの子供だろうがよ。」

公平 「…。」

梶原 「…。」

公平 「それは、そうですけど。でも、美幸は私には似てなくて、母もがっかりだって…。」

梶原 「がっかり？」

公平 「はい。」

梶原 「…。」

公平 「それに…。美幸は…ちっとも僕に懐かなかった。これでも父親ですからね、休みの日には美幸の世話もしてたんですよ。」

公平、ふと、視線を逸らす。

回想エリアAに明かりが灯る。

事件前の根本家。

美幸が折り紙で遊んでいるのを手持無沙汰にただ見つめている公平。

美幸 「パパ、何色が好き？」

公平 「あー、何色でもいいよ。」

美幸、折り紙で何かを作っているらしい。

公平 「ほら、折るならもつとちゃんと折りなさい。」

たまに、面倒臭そうに相手をする。

しかし美幸のささいな仕草が何かと気に障る。

美幸 「みゆねー、これ、パパにあげるの。」

公平 「美幸、何度も言ってるだろ。いつまでもそんな赤ちゃんみたいな喋り方するんじゃない。みゆじゃない。私だろ。」

美幸 「…はい。」

公平 「ほらー、ちゃんと折らないと折り紙もつたいないだろ。全く誰に似たんだ。不器用だなあ。」

美幸 「…。」

公平 「どうした？もうやらないんだったらちゃんと片づけなさい。」

美幸、どこかに行ってしまった。

公平 「美幸、美幸。どこ行くんか。美幸。」

公平、美幸を呼びながら取調室に戻る。

公平 「やっぱり父親じゃ子供の世話なんてできないんですよ。」

田村 「そうでしょうか？」

公平 「そうですよ。やっぱりそこは母親がちゃんとしていないと。」

田村 「僕は…親父、大好きでしたけどね。」

公平 「美幸は僕のが好きじゃなかった。」

梶原 「…だから、放っておいたのか。」

公平 「いや、だから、義務はちゃんと…。」

梶原 「義務ってなんですか？」

公平 「養育費は払ってましたよ。ちゃんと。」

梶原 「そういうことじゃねえ。」

公平 「あんたにも責任があるんじゃないかねえかって言ってるんだよ。」

公平 「だから、養育費は。」

梶原 「なんで引き取ろうとしなかった。」

公平 「だって、当然じゃないですか。似てないんですよ、美幸は僕に。それに懐きもしなかった。かわいがれる訳ないじゃないですか。」

梶原 「それでも、あんたの子供だったんだろ。」

公平 「え？」

梶原 「オレは、あんただって親だったんだろって言ってるんだよ！」

沈黙。

田村 「ちよっと、場所、替えましょうか。根本さん、あちらの部屋へ移動して頂けますか。」

公平 「あ、…はい。」

梶原 「田村…。」

田村 「梶原さん、ちよっと休んでてください。隣使います。さ。」

田村、根本を連れて出て行く。

残される梶原。しばらく動かない。

やがて、ゆっくりと机の上に残された紙コップを片付けだす。

重ねたそれを屑籠に投げ入れる。

コップは屑籠のふちに当たり床に落ちる。

その乾いた音を聞きながら、梶原、椅子に深く腰掛ける。

ノックの音。

梶原、ドアを開けに行く。

署長。

署長 「お疲れ。」

梶原 「…お疲れさんです。」

署長、入っても？とゼスチャー。

梶原 「どうぞ。」

署長、椅子に掛ける。

署長 「どう？」

梶原 「今、隣で田村が。」

署長 「そう。」

梶原、立ち上がって深々と頭を下げる。

梶原 「昨夜は、本当にお騒がせしました。」

署長、いいよいいよと手を振る。

署長 「少しだけ熱も下がってきて、今、アイス食べてるって。」

梶原 「…本当、すみません。」

署長、数回肯く。

署長 「静ちゃん来たってさ。」

梶原 「あいつが？」

署長 「うちの連絡したって。いいだろ？」

梶原 「…はい。」

署長 「ケイタ君、なかなか言葉を覚えてくれなくてね。物を教えるというのは、難しいもんだね。ペットショップの店員は、さも簡単そうに言ったんだよ。」

梶原 「子供みたいすね。」

署長 「子育てか。そうだな。やっぱり子育ては苦手だよ。」

梶原 「…。」

署長 「まあ、そういうことだから、とりあえず安心して。」

梶原 「…ありがとうございます。」

署長 「静ちゃん、今日は実家連れてくってさ。」

梶原 「…はい。」

署長、梶原の肩をトントンと叩く。

署長 「あ、そうだ。資料、ちょっと読んだんだけど。」

梶原 「はい。」

署長 「兇相の小西さん、発見現場にいたみたいだね。」

梶原 「ええ。」

署長 「話は？」

梶原 「当日にちよっと。」

署長 「彼女、君の時はあんなに熱心だったのに。署にも何度も来たっけね。」

梶原 「あのときはご面倒を。」

署長 「いや、いいんだ。それも仕事のうちだからね。」

梶原 「はあ。」

署長 「あの頃の彼女だったら、もっと早くに押しかけてたっていいだろうに。何かあったのかな。」

梶原 「当たってみます。」

署長 「余計なこと言って悪いね。」

梶原 「いえ。」

署長 「でもね、たまに疼くんだよ。」

梶原 「何がですか？」

署長 「刑事魂ってやつかな。」

梶原 「いえ。」

署長、去る。

梶原、署長が出て行ったのを見送って、深くため息。
資料を読み出す。

回想エリアBに明かりが入る。

梶原の家。

ドアにノックの音。

梶原、しばらく無視しているが、やがて苛立たしげに扉に近づく。

のろのろと鍵を開ける梶原。

すかさずドアが開き、女（小西智美）が玄関に入ってくる。

派手な色の細いフレームの眼鏡、派手目のスーツ、大き目のブランドバッグ。染めた髪。

全体的に近づきたい印象だが、強いまっすぐな目をしている。

小西、正対して、まっすぐ梶原を見つめる。

しばらく睨みあう間。

梶原 「…なんだい、あんた？」
小西 「梶原：俊彦さんでいいのよね。」
梶原 「ああ。」
小西 「翔太君は、保育園？」
梶原 「なんだ、あんた。」
小西 「ああ。」

小西、バッグから、ブランド物の名刺入れを取り出す。

小西 「R市児童相談所の小西智美と申します。」
梶原 「ああ。」
小西 「電話、止まってるみたいで。」
梶原 「え？…ああ。使わないからな。」
小西 「郵便受けにお手紙を。」
梶原 「見てなかった。」
小西 「そう。」

沈黙。

小西 「あの、入っても？」
梶原 「あー、もう少ししたら出ないと。」
小西 「え？今から？」
梶原 「…遅番なんだ。」
小西 「そう。大変ね。」
梶原 「その間、翔太君は？」
梶原 「…留守番を…。」

小西、相手の出方を伺っているような沈黙。
小西、ちよつと息を吸い込み、一瞬止める。

小西 「ここ右に曲がったところにローソン、あるでしょ。」
梶原 「…ああ。」
小西 「翔太君、夜中に来たみたいで。」
梶原 「え？」
小西 「お父さん、知らなかったんですか？」

梶原 「…喰いもんはちゃんと置いてってるんだけど。」

小西 「(メモを見ながら) 今月二回、スナック菓子とジュース。それとおまけつきの菓子パン。」

梶原 「二回も?」

小西 「先月は五回。」

梶原 「そんなに?」

小西 「真夜中近くに来ることもあったって。それで、心配した店員が通報を。」

「…。」

小西 「本当に知らなかった?」

梶原 「…ああ。」

小西 「翔太君ね、電話、してたみたい。」

梶原 「電話?」

小西 「公衆電話で。誰にかけてたか、わかる?」

梶原 「…。」

小西 「心当たりあるんじゃない?…お母さん、でしょ?」

梶原、苦々しげに肯く。

小西、しばらく黙っているが、思いきった様に、

小西 「梶原さん、翔太君、お母さんの所に行った方が」

梶原 「勝手に出たってた奴になんか任せられるか」

小西 「でも」

梶原 「翔太だって納得してる。」

小西 「だったら、せめて施設に…。」

梶原 「施設?ふざけるな。翔太は大丈夫だ。」

小西 「でも」

梶原 「出たってくれ。」

小西 「梶原さん、ひとりじゃ大変だと思うから、私たちは」

梶原 「頼むから出たってくれ。」

小西 「ちよっと、梶原さん話だけでも」

梶原、黙って小西をドアの外に押し出す。

小西 「梶原さん、梶原さん!」

小西、ドアを叩き続ける。

梶原、しばらくその前に佇み、ゆっくり取調室に戻る。

ノックの音。

梶原 「田村？」

返事がない。

ノックの音。

梶原、面倒くさそうにドアを開ける。

ドアの前におずおずと気の弱そうな眼鏡の男。上村。

くたびれたつるし売りのスーツ。

野暮ったい眼鏡。

パンパンに物が詰まった重そうな鞆。

梶原 「…誰だ、あんた。」

上村 「あ…梶原さん…ですか？」

梶原 「ああ。」

上村 「あの…僕は上村って言います。」

梶原 「上村…？」

上村 「ええ。あの…Q小学校の…。お分かりになりますか？」

梶原 「ああ。確か発見者の…。現場で吐いてて。」

上村 「あー、はい。あの…その節はご迷惑を。」

梶原 「いやいや。よくあることだから。」

上村 「本当ですか？」

梶原 「あ、まあ。ああいうの見ちやうとね。」

沈黙。

上村、落ち着きなくハンカチを握りしめている。

梶原 「あの…今日は？」

上村 「あー、ちよっとお話ししたいことがあります…。」

梶原 「じゃあ。どうぞ。」

上村 「おじゃまします。」

上村、おずおずと入ってくる。

上村、落ち着かずに周りを見回している。

梶原、椅子を進める。

梶原 「どうぞ。」

上村 「ありがとうございます。」

沈黙。

梶原 「今日は…。」

上村 「あの！事件は？」

梶原 「あー、上村さん…」

上村 「わかってます。別に、知りたいわけじゃないんです。ただ、会えませんかね、根本美幸ちゃんの…お母さんに。」

梶原 「え？」

上村 「無理ですかね。」

梶原、しばらく考えて、

梶原 「わかりました。ちょっと待っていただけますか？」

上村 「はい。」

梶原、資料などを持ち、出て行く。

上村、しばらくただハンカチを握りしめたり、膝の上で畳み直したりしている。
落ち着かずに部屋の中を歩き回る。

回想エリアAに明かりが灯る。

美幸 「あの…？」

上村 「え？」

美幸 「せんせい、せんせい…」

上村、誰かに呼ばれたように回想エリアAに歩いていく。

上村の務めるR市立Q小学校。

根本美幸が通うはずだった小学校だ。

正面玄関そばの廊下。

上村 「あれ、どうしたの？」

美幸 「先生？」
上村 「そうだよ。」
美幸 「…。」
上村 「どうしたの？」
美幸 「これ。」
上村 「はがき？」
美幸 「うん。」

上村、いぶかしげに、それでも少女の目線に近づく。
少女が裸足なのに気づく。

上村 「あ、上履き。」
美幸 「あの、持っていないの。」
上村 「裸足じゃ冷たいでしょ。」
美幸 「…。」
上村 「寒いんじゃない？」
美幸 「いいの…。」
上村 「…そう？」

美幸、はがきを差し出す。

上村、少女の手から就学児健診の通知はがきを受け取る。
ぐちゃぐちゃに握られた就学児健診のお知らせのはがき。

上村 「根本、美幸ちゃん。」
美幸 「はい。」
上村 「来年、一年生なんだね。」
美幸 「うん。」
上村 「今日は？」
美幸 「今日来ないと学校入れないって…。」
上村 「学校入れない？あー、健診？」

美幸、肯く。

上村 「あー、もう終わっちゃったな。」
美幸 「ごめんなさい…。」

上村、美幸の落胆ぶりに気づき、

上村 「大丈夫。あ、今日はもう終わっちゃったんだけど、またお母さんと一緒に」
美幸 「だめ。」

上村 「え？だめ？」

美幸 「だめ。お母さんに内緒。」

上村 「内緒？どうして？」

美幸 「ねえ、なれる？」

上村 「え？」

美幸 「みゆ、一年生になれる？」

上村 「一年生になれる？」

上村、つぶやきながら取調室に戻る。

苦しそうに机に突っ伏す。

梶原が戻ってくる。

上村の様子に気づく。

梶原 「大丈夫ですか？」

上村 「…。」

梶原 「上村さん？」

上村 「…。」

梶原 「先生。」

上村 「え？ああ。」

梶原 「具合悪いですか？」

上村 「思い出しちゃって。」

梶原 「そりゃあそうですよ。なかなか無いですからね。あんな経験。」

上村 「そうじゃないんです。」

梶原 「ていうと。」

田村、佐々木が、幸を連れて入ってくる。

上村 「僕が…美幸ちゃんを死なせたんです。」

梶原 「え…？」

田村 「あ、ちよつと！」

幸、田村、佐々木を振り切って上村の傍に立つ。

幸、上村を強く見つめる。

上村、幸に気づく。

上村、幸に近づき、

上村 「すみません！すみません！僕が…僕がもつとちゃんとしていれば美幸ちゃんを死なせないで済んだんですよね？気づいてたのに、気づいてたのに何にも、何にもでさなくて！」

幸、ふらっと上村に近づこうとする。

田村、気づき止める。

幸 「そうよ。」

上村 「え？」

幸 「あんたが美幸を殺した。」

田村 「おいちよっと。」

幸、錯乱したように部屋中の人間を睨みつけながら叫ぶ。

幸 「あんたが、あんたが、あんたが、美幸を殺した！」

田村 「君、根本を。」

佐々木 「はい。」

田村、佐々木、幸を取り押さえようとする。

幸 「離せ！みんなで私からみゆを！みゆを取り上げようとしたじゃない！」

田村 「根本、落ち着けて！」

幸 「みんなでみゆを！」

田村、佐々木、幸を連れ出す。

幸 「許さない！

絶対に許さないから！」

連れ去られる幸の声が廊下に響く。

上村、土下座のまま、肩で息をしている。

乱れた室内。

梶原、のろのろと倒れた椅子などを直している。

梶原 「大丈夫か。」

上村 「…はい。」

梶原、椅子に座り、ポケットから缶入りのフリスクを出し、ぎらぎらと口に入れる。

上村、それを見ている。

梶原、それに気づき、

上村 「…。」

梶原 「いりますか？」

上村 「…はい。」

梶原、上村の手の平にフリスクを出してやる。

上村 「どうも。」

二人、フリスクを食べている間。

梶原がカチリと噛み潰す音が響く。

上村 「うちの母もあんなでした。」

梶原 「ん？」

上村 「さっきの。」

梶原 「根本か。」

上村 「はい。」

沈黙。

梶原 「お伺いしても？その話。」

上村 「…ええ。」

梶原、座り直す。

上村 「…ちゃんと覚えてるわけじゃないんです。すごく小さかったから。」

梶原 「うん。」

上村 「ある日、数人の大人たちが迎えに来て、訳もわからないまま母から引き離されて、車に乗せられて。」

梶原 「誘拐みたいだな。」

上村 「あ、そうですね。本当だ。」

上村、少し笑う。

が、すぐにまた苦しそうに俯く。

梶原 「何があったんだ？」

上村 「…大人になってから聞かされた話ですけど。うち、両親が離婚しちゃって。母親は、女手一つで誰にも頼らず僕を育てようとしてただけど、どうにもできなくなっちゃったみたいで。ご飯も満足に食べられない日が続いて。近所の人が見るに見かねて通報したみたいで。」

梶原 「…そうか。」

上村 「連れてかれたのは市の児童福祉施設で。高校出るまでそこで育ちました。（誤魔化すように笑いながら）結構…つらくて。今でも夢に見るんですよ。もう本当にあったことなのかもわからないですけど。母親が、僕の乗せられた車を追いかけてくるんですよ。何度も何度も転びながら、大きな声で僕のこと呼んで。」

沈黙。

上村 「これ。」

梶原 「ん？」

上村 「からいですね。」

梶原 「そうか？」

上村 「はい。」

梶原 「そうかな。」

上村 「すぐ。」

上村、鼻をすする。

上村 「僕、気づいてたんです。」

梶原 「なにが。」

上村 「美幸ちゃんがちゃんと世話してもらえてないこと。すぐ、すぐ痩せて小さかったし、洋服だって体に合ってなかった。学校に来た日は冬の初めで、ものすごく寒

「い日だったのに、裸足だったし。」

梶原、ガリッとフリスクを嘔む。

梶原 「…なんで、何もなかった。」

上村 「…暴力は受けてないようだったから。」

梶原 「そういうことじゃないだろう。」

上村 「わかってます！わかってますよ！僕だって、何度も自分を責めました！でも、あの時は…！決断できなかったんです。」

梶原 「…バカ野郎。」

上村 「だって、誰にわかるんです？施設に行って辛い思いするかもしれない、居場所が無くて、僕みたいに！」

梶原 「それでも！」

上村 「…。」

梶原 「それでも、生きてたかもしれないねえんだ。今頃、生きてここに居られたかもしれないねえンだよ！」

上村 「…。」

梶原 「…餓死だぞ…根本美幸は、誰もいない部屋ン中で何にも食うものも飲むものもなくて…。独りぼっちで死んだんだぞ…。」

上村 「…。」

梶原 「居場所が無いだ？それがなんだってんだ！」

上村 「…。」

梶原 「誰にも気づいてもらえないまま死んじゃうのとどっちがマシなんだよ…。」

上村 「…。」

梶原 「お前、わかってんのかよ…。」

上村 「…そう、ですよね。」

二人、黙り込む。

上村 「…（美幸ちゃんは）一年生になれる？って聞いたんです。」

梶原 「…。」

上村 「就学児健診の日、遅くに、もう、全員帰っちゃって後片付けしてた僕の所に来て…。」

梶原 「…。」

上村 「冷たい手で、くっしやくしやのハガキ握りしめて。一年生になれる？って聞いたんです。」

梶原 「…そうか。」

上村 「…それなのに、僕は…。」

梶原 「…。」

上村 「…僕が、殺したんです…。」

ドアが開く。

田村、入ってくる。

梶原 「根本は？」

田村 「ようやく落ち着きました。あー、今日は（取り調べ）無理っすね。」

上村 「すみません。」

田村 「えっと？」

梶原 「あー、Q小学校の…。」

上村 「根本美幸さんの昨年度の担任の上村です。」

田村 「あー、どうも、捜査一課の田村です。」

梶原 「ほら、発見現場で。」

田村 「あー。」

梶原 「田村。」

田村 「すみません。」

梶原 「先生。申し訳ないですが、もう数点お聞きしても？」

上村 「どうぞ。」

田村、椅子に掛ける。

梶原 「美幸ちゃん。」

上村 「はい。」

梶原 「結局、先生が会ったのは？」

上村 「一昨年の一月の就学児健診の日だけです。」

梶原 「入学式にも来なかった。」

上村 「はい。」

田村 「連絡はしなかったの？」

上村 「いえ、度々。でも、その度留守で、お母さんとは…。」

梶原 「話せなかった。」

上村 「はい。」

梶原 「一年間、連絡は一回だけ？」

上村 「いえ。不登校の子も多いんで。学校でも定期的に連絡するように決められていて。」

梶原 「へえ、そういうもんか。」

田村 「最近は大変なんすよ、学校も。ねえ。」

上村 「ええ。」

梶原 「ふーん。」

田村 「家には？」

上村 「数回行きました。でも、誰もいなくて。」

梶原 「おかしい様子は？」

上村 「特には。ただ、だんだん郵便物とかが溜ってって、僕が気づかない間に引っ越したのかなって。」

田村 「初めて家に行ったのは？」

上村 「入学式の日。」

梶原 「入学式？」

田村 「梶さん。」

梶原 「ああ。」

上村 「なにか？」

田村 「入学式の日の様子を少し詳しく聞かせてくれませんか？」

上村 「あの日は、午前中で式は終わったのですが、美幸ちゃんだけ欠席で、あんなに楽しみにしてたのに連絡もなかったから、少し気になって。」

回想。入学式当日の日の夕暮れ時。

公園で遊ぶ子供の声。

ドアの前に、袋に入った教科書と、入学式の紅白まんじゅうを持った上村。

ドアのチャイムを鳴らそうとする。

不意に人影。

幸。

飛び出してきて、ドアの前に立ちふさがる。

幸 「何の用ですか？」

遠くから遮断機の音。

上村 「あの。」

幸 「何か用ですか？」

上村 「僕、今度美幸さんの担任になった…。」

幸 「美幸は学校へは行きません。」

上村 「え？あの…？」

幸 「美幸は、まだ学校へは行きません。」

上村 「あ、体調とか…？」

幸、頑なな表情で肯く。

上村 「そうですか。」

幸 「躰が弱いんです。」

上村 「あの、お医者さんへは？」

幸、肯く。

上村 「そうですか…。」

幸 「…。」

上村 「残念ですね。美幸さん、学校に来るのを楽しみにしてたのに。」

幸、表情が変わる。

幸 「なんで。」

上村 「え？」

幸 「みゆと、どこで…。」

上村 「就学児健診の」

幸 「ダメだって言ったのに！」

上村 「え？あの。」

幸 「放って置いてください！」

上村 「あ、お母さん。」

幸 「お母さん？」

上村 「え？あの」

幸 「なれなれしく呼ばないでよ！」

上村 「あの、僕はただこれを美幸さんに」

幸、黙って上村の持っているものをひったくるように受け取る。

上村 「あの、お大事に。」

幸、黙ってドア鍵を開けようとする。

慌てていてなかなか開かない。

上村 「早く学校に来てねって伝えてください。」

ドアがようやく開き、幸が慌てて部屋に入る。

上村の前でドアが音を立てて閉まり、その音がコンクリートの壁に重く響く。

上村、ドアの前に佇んでいる。

梶原 「その時、根本は家に入って行ったんですね。」

上村 「はい。」

田村 「ドアにガムテープの目張りは？」

上村 「いえ。全然。ただ…。」

梶原 「ただ？」

上村 「…すぐく、慌てて、鍵を開けにくそうにしていたのは覚えてます。」

梶原 「なるほど。」

田村 「あの、念のためお伺いするんですが。」

上村 「はい。」

田村 「確かに、入学式当日ですよね？」

上村 「はい。間違いありません。」

梶原 「なるほど。」

田村、梶原、顔を見合わせる。

梶原、肯く。

梶原 「上村さん、今日はこの辺で。」

田村 「またいくつもお聞きすることが出てくるかもしれませんが。お手数ですがその際はまた。」

上村 「もちろんです。」

田村 「あー、最後に一つだけ。」

上村 「何でしょう？」

田村 「なんでもう一步踏み込まなかったの？」

上村 「児童相談所が動いてるって聞いて。」

梶原 「小西さんか。」

上村 「はい。児相が動いてれば、もう大丈夫って思ったんです。その時は。」

梶原 「…。」

上村 「責任逃れですね。でも、小西さんも何度かお母さんに連絡取ってたって聞いて安心してしまったんです。」

梶原 「そうか。」

上村 「小西さんとは？」

田村 「それがまだ。」

上村 「きつと、僕が知らないこと、知ってると思いますよ、小西さん。二年前くらいから何度か通報もあったみたいで。」

梶原 「二年前。」

上村 「そう聞いてます。」

刑事たち、目を合わせ肯く。

梶原 「上村さん、ありがとうございます。」

田村 「また思い出したことがあったらいつでも。」

上村 「はい。必ず。」

上村、出て行こうとする。

振り返り、

上村 「あの、色々とすみませんでした。」

田村 「あー、こちらこそ、ありがとうございました」

上村、気まずそうにお辞儀して去る。

梶原 「小西、呼び出してみるか。」

田村 「兎相でしたっけ。」

梶原 「ああ、変わってなけりやな。」

田村 「知り合いましたよね。」

梶原 「…まあな。」

田村 「連絡…。」

梶原 「頼めるか。苦手なんだよ、お役所。」

田村 「わかりました」

梶原 「しっかし…応えるなあ。」

田村 「疲れましたね。」

梶原 「…なあ、田村。」

田村 「はい。」

梶原 「俺、ちゃんと親やってるか。」

田村 「なんすか。いきなり。」

梶原 「俺は翔太の世話、ちゃんとできてるかって聞いてんだ。」

田村 「頑張ってると思いますよ。」

梶原 「なんだよ、上からだなあ。」

田村 「すみません。…どうしたんですか?」

梶原 「上村先生が言った。美幸ちゃん、世話してもらえてないみたいだったって。」

田村 「ああ。」

梶原 「実はな、俺もあるんだよ。近所の奴に通報されて翔太を施設にとられそうになったこと。」

田村 「え?大変じゃないすか。」

梶原 「…。」

田村 「なにがあったんすか。」

梶原 「俺の遅番の日に、夜中に翔太が何度か一人で出かけたって通報があったみたいで。

田村 「あー。そうだったんですか。」

梶原 「頑張ってるつもりだったんだけどな。どうしても手の届かないことがあるんだよ、

片親じゃな。そこを突き付けられちゃったみたいで…。」

回想エリアに梶原、すごい剣幕で翔太に詰め寄る。

梶原 「どういうことだ。」

梶原 「どういうことだって聞いてるんだ。」

梶原 「夜中に外に出ちゃダメだって言ってるだろ。」

梶原 「嘘つけ。ちゃんと知ってるんだ。」

梶原 「電話、してたんだろ?な?ママに電話してたんだろ?」

梶原 「なんで正直に言わないんだよ!え?」

梶原 「泣いてないで何とか言ったらどうなんだ!」

梶原、逆上して子供の襟首を掴んで殴ろうとする。

その時、子供が咄嗟にママを呼び、

梶原 「ママなんて呼ぶな！あいつはお前を捨てて出て行ったんだぞ！」

梶原、子供を強く揺さぶるが、我に返り突き飛ばす。

梶原 「…もういい。あっちへ行け。」

梶原 「あっちへ行けって言ってるだろ！」

子供、慌てて梶原の元から離れる。

梶原、ドスンと座り髪を掻き毟る。

梶原 「何やってんだ、オレは…。」

梶原、しばらく座っているが、ゆっくりと取調室に戻る。

梶原 「つい、手を上げちまうことだってあるんだ。口もききたくないことだってあるんだ。

忙しくて、洗濯溜めちまって、何日も同じ格好させてたことだってあるんだ。」

田村 「…。」

梶原 「俺なんか本当は根本に偉そうなことなんて言えねえんだよ。」

田村 「…。」

梶原 「なあ、田村、俺もいつかまた翔太を傷つける日が来るんじゃないか？」

田村 「大丈夫です。梶さんは。」

梶原 「本当か？」

田村 「はい。…でも、無理はしてほしくないす。」

梶原 「…わかった。」

沈黙。

梶原 「しかしあれだな。根本。」

田村 「ああ。」

梶原 「精神鑑定しようがねえかもな。」

田村 「手配しときます。」

梶原 「おう。」

田村、資料などをまとめだす。

梶原、そんな田村を後目に、

田村 「報告書上げときまーす。」
梶原 「田村。ちよつと、行かねえか。」
田村 「え？珍しいっすね。翔太君は」
梶原 「いいんだよ、今日は。行こうぜ。」
田村 「や、ちよつと今日は。」
梶原 「なんだよ。」
田村 「デートす。」

田村、とつとと支度して出ていく。

田村 「お疲れっす。」
梶原 「…なんだよ、せつかくよー。」
田村 「あ、梶さん。当番すよ、ケイタ君。」
梶原 「マジか。」
田村 「さぼらないでくださいよー。」
梶原 「うっせ。早く行け。」

田村、出ていく。

梶原、どっさりと椅子に座る。

梶原 「長え一日だな。」

梶原、そのまま、うとうとと寝入ってしまう。
少しずつ、日が暮れていく。
薄暗くなる室内。

しばらくして、静かな足音。
ゆっくりとドアが開く。
だが、梶原は、眠ったまま。
梶原の傍に長身の男。
薄暗く、顔はよく見えない。
梶原が眠っているのを、ただじっと見ている。

回想エリアBにぼんやりと薄明かり。
静香。

静香 「ねえ。譲ってくれないかな。」

回想エリアAにも薄明かり。
幸。

幸 「そうよ。」

静香 「認めてくれないの、わかってるけど。」

幸 「あんたが殺した。」

静香 「まだ母親、必要なだって。」

幸 「あんたが、あんたが、あんたが、殺した！」

静香 「今は意地張ってなんとかできても、そのうち絶対うまくいかなくなるよ。」

幸 「みんなで私から取り上げようとしたじゃない！」

静香 「私、あきらめないから。」

幸 「みんなで！」

静香 「裁判でも何でもやって、絶対取り返すから。」

幸 「許さない！絶対に許さないから！」

飛び起きる梶原。

回想エリアから明かりが消え、静香、幸が消える。

梶原、傍の男、神宮寺に気づく。

神宮寺 「魔されていましたよ。」

梶原 「誰だ。」

神宮寺 「大丈夫ですか。」

梶原 「なんでここにいる。」

神宮寺 「すみません、勝手に。ここにいらっしやると伺ったものですから。」

部屋の電気がつく。

署長が入ってくる。

署長 「やー、探しましたよ。」

神宮寺 「ああ、すみません。」

神宮寺、ジャケットのポケットから皮の名刺入れを出す。

梶原に名刺を渡しながら、

神宮寺 「神宮寺良徳と申します。」

梶原 「貴方が。」

神宮寺 「ご連絡いただいたものですから。」

梶原 「あー、そうですね。…あ、田村、帰っちまったか…。」

神宮寺 「また出直してきますよ。」

梶原 「すみません。明日にでもまた」

神宮寺、懐から皮の高そうなケースに収まったスマホを取り出し、スケジュールを確認する。

神宮寺 「わかりました。」

梶原 「すみません。」

神宮寺 「梶原さん、でしたっけ。少し、世間話をしませんか？」

梶原 「はあ。」

神宮寺 「せっかくですから。」

梶原 「はい。」

神宮寺 「最近よく眠れていないようだ。悪い夢を見るのでは？」

梶原 「…忙しかったもので。」

神宮寺 「悩み事か？」

梶原 「そうですね。人並みには…。」

神宮寺 「(じっと梶原の目を覗き込む。) 目を見られるのは苦手ですか？」

梶原 「見られるのには慣れてませんね。」

神宮寺 「責任感が非常に強いようですね。」

梶原 「いや、そんな…。」

神宮寺 「自分の弱味を見せたくない。」

梶原 「…え？」

神宮寺 「こうあるべきということに固執し過ぎる。」

梶原 「なにを…？」

神宮寺 「だから、抱え過ぎてある日、壊れる。」

梶原 「…！」

署長 「神宮寺さん、それは？」

神宮寺 「行動分析です。眼球運動。手の動き。呼吸数の変化。そんなものを観察するんですがね。最近では、日本の警察でも、導入されているんですよ？」

署長 「はあ。」

神宮寺、少し笑う。

神宮寺 「梶原さん、今日は眠れるといいですね。貴方は幸と同じ眼をしている。幸もあの頃はよく眠れないと言っていた。」

梶原 「根本が？」

神宮寺 「夢を見ると言っていました。」

梶原 「…。」

神宮寺 「では、明日。」

神宮寺、署長、出て行く。

梶原、ゆっくりと長く息を吐き出す。

梶原 「あれが、神宮寺良徳か。」

梶原、渡された名刺を見る。

梶原 「精神分析医…。」

署長、戻ってくる。

署長 「悪いね。ちょっと手が離せなかったもんだから」

梶原 「あ、当番。」

署長 「いいよいいよ。大変だったろ？今日は。」

梶原 「すみません。」

署長、労うように肯く。

梶原 「オレもちょっととうとうとしてて。」

署長 「今日、良かったら来るかい？たまには、どうだ。」

梶原 「…いえ。今日は。」

署長 「そうか。」

署長、ちょっと肩を落とす。

署長 「カミさんと二人の食事もまだちょっとさみしくてさ。」

梶原 「あー、そっか美里ちゃん。」

署長 「いつまでも家に居られてもアレだけどさ。」

梶原 「おめでどうございます。」

署長、いいのいいのと手を振る。

署長 「いや、めでたいというには、ちょっとあれだけどね。まあ、しょうがないというかね。」

梶原 「やっぱり複雑ですか？」

署長 「うん。まあちょっとね。」

梶原 「すみません。」

署長 「謝ることじゃないよ。また、誘ってもいいかな。うちの顔見たがってるよ。」

梶原 「是非。」

署長 「じゃ、お疲れ。」

梶原 「お疲れっす。」

署長、出て行く。

梶原、帰り支度をする。

梶原 「…根本と同じ眼か…。んなわけあるかよ！」

ドアを乱暴に閉める。

ポケットのスマホを取り出し、ダイヤル。

しばらく呼び出すが相手は出ない。

歩いて、回想エリアBへ。

誰もいない自室。
上着を投げ出し横になる。
もう一度、同じ番号にダイヤル。
呼び出しているが出ないようだ。そのまま眠りに落ちてしまう梶原。

4

五月五日

台所からご飯の支度をする物音。
横になっている梶原には、いつの間にか布がかけられている。
しばらく、台所の物音を聞きながらまどろんでいる梶原。
現実気がつき、飛び起きる。
物音に気づき、出てくる静香。

静香 「おはよう。」
梶原 「お前…。」
静香 「起きた？」
梶原 「来てたのか。」
静香 「電話したんだけど出ないから、勝手に入ったよ。」
梶原 「ああ。」
静香 「ご飯、食べるでしょ。」
梶原 「いいのにな。」
静香 「ついで。翔太の着替え、無かったし。」
梶原 「そうか。」
静香 「食べる？」
梶原 「あ、先支度するから。」
静香 「昨日、電話出られなくて。」
梶原 「ああ。翔太どう？」
静香 「大丈夫。もうすっかり元気になっちゃって。今日は久しぶりにおばあちゃんと出掛けるってはいやいでる。子供の日だしね。」

梶原 「そうか。」

静香 「今日はこのまま一緒に居たいんだけど。」

梶原 「…。」

静香 「ダメかな。」

梶原 「…。」

静香 「母さんも久しぶりに会えて喜んでるし。」

梶原 「…いいよ。」

静香 「良かった。有難う。」

梶原 「かえって助かるよ。」

静香 「何か…大変なんでしょ？」

梶原 「いつものことだ。」

静香 「そう。」

静香、翔太の物を手早くまとめる。

梶原は、黙々と支度をする。

静香 「じゃあ、そろそろ行くね。」

梶原 「ああ。」

静香 「うたた寝、しちやダメだよ。風邪ひく。」

梶原 「うん。」

静香、玄関で屈んで靴を履く素振り。

梶原 「飯、有難う。」

静香、振り返り、ちよつと驚いた顔で梶原を見つめる。

身体を起こし、少し乱れた髪を整える仕草。

梶原 「どうした？」

静香 「…なんかそういうの、ちよつと久しぶりだね。」

梶原 「なに？」

静香 「いや、初めてかも、有難うなんて言われたの。」

梶原 「そうか？そうかな。」

静香 「…また、連絡する。」

梶原 「おう。翔太、頼むな。」

静香、少し照れくさげに微笑み、肯き、出て行く。

梶原、支度の手を止め、しばらくぼーっと静香の去って行ったドアを見つめている。

やがて、スマホを取り出し、ダイヤル。

梶原

「あ、梶原つす。ちょっと体調崩しちゃったみたいで。はい。いや、ちょっとだけ遅れて行かせてもらっても？あ、はい。いや、そんなには、あ、ありがとうございます。す。はい。失礼しまーす。」

電話をかけながら、ゆっくりと立ち上がり、台所に行く。

食事をしている物音。

回想エリアAに足音。

幸の自宅前。

小西、(上村)、幸に案内されてマンションの廊下を歩いてくる。

目の前に、ガムテープで目張りされたドア。

その前で立ち尽くす無表情な幸。

ドアの異様さに戸惑う小西。

小西、戸惑いながらもピンポンを押す。

室内にその音は響いているが、応答は無い。

不安になりながら、何度もピンポンを押し続ける小西。祈りながら無我夢中に。

不安になりながら何度も。

そのうち、嫌な予感が募り、ドアをノックする。

何度も何度も。それでも、返事はなく、さらに不安になった小西、ドアを開けよ

うと必死にガムテープを剥がし始める。

そんな小西を幸は、ただ冷ややかに見つめている。

やがて、ドアが現れ、小西は問いかけるように幸を見つめる。

無表情に見返す幸。

鼻を衝く異臭。

幸、強く小西を見つめたまま、ゆっくりと口を開く。

小西、思わず耳をふさぐ。

幸

「その言葉は聞こえない」

幸、小西を残し、去る。

小西、耳をふさいだまま、一人ドアの前に残される。

やがて小西、恐る恐るドアを開き、その中に足を踏み入れる。
玄関に入ってすぐ、床の上に何かを見つけた。
よろめいて、壁にすがりつく。口を押え、喘ぐ。

ゆっくりと立ち上がり、取り調べ室へ。

項垂れたまま、椅子に腰を掛ける。

足音。

コーヒーを二つ持った署長が現れる。

手がふさがっているのうまくドアを開けられずにいる。

小西、気づき、さっと立ち上がり、ドアを開ける。

署長 「あー、有難う。」

小西、軽く会釈してまた椅子に戻る。

署長、コーヒーを小西の前に置く。

署長 「ブラックで良かったっけ。」

小西 「はい。」

署長 「どうぞ。」

署長、そう言いながら、大量の砂糖とミルクを入れる。

小西、それを見ている。

小西 「ありがとうございます。」

署長 「せっかく来てもらったのに、悪いね。」

小西 「いえ。」

署長 「どこか、行かないの？」

小西 「特には。」

署長 「混んでもんね、どこも。」

小西 「そうですね。」

二人、コーヒーを飲む。

小西 「…おいしい。」

署長 「だろ。コーヒーマーカー、新しくしたんだ。」
小西 「…。」

署長 「もちろん、私のポケットマネー。煩いだろ？こういうのって。」

小西、苦笑い。

署長 「ようやく、少し笑った。」

小西 「え？」

署長 「元気なかったから。」

小西 「…。」

署長 「大変だったね。」

小西 「…。」

署長 「第一発見者だろ？」

小西 「…はい。」

署長 「見た？」

小西 「え？」

小西、ふと、視線を回想エリアAに。

ドアの中に明かりが一瞬入る。

怯えた表情の小西。

そんな小西を署長、見つめる。

署長 「ケイタ君。」

小西 「え？」

小西、我に返る。

署長 「ケイタ君だよ。」

小西 「あ、あの変な着ぐるみ。」

署長 「あー、それを言っちゃダメだよー。R署の一日署長、ゆるキャラのケイタ君。イケてると思うんだけどな。でもね、本当のケイタ君は傍にいたオウムだよ。気づかなかった？オウムのケイタ君。」

小西 「オウム？しゃべるんですか？」

署長 「それが全然なんだよ。」

小西 「そうですか。」

署長 「ネットで調べたり、ペットショップに聞いたりしたんだけどさ。毎日、一緒に寝た

りね。」

小西 「一緒に寝たり？」

署長 「もちろんだよ。ずーっと話しかけてね。しかし、何かを教えるというのは、難しいことだね。」

小西 「…本当に。」

二人、コーヒーを飲む。

少し柔らかな空気が流れる。

数人の足音。

小西、背筋を伸ばす。

署長、緊張した小西を横目で見ている。

ドアが開き、田村が入ってくる。

田村、資料を抱えている。

そして、佐々木。

田村 「すみませーん。お待たせしちゃって。」

署長 「お疲れ様。」

田村 「大変でしたよ。暑くて。」

署長 「イケてない方のケイタ君。」

田村 「初めまして。捜査一課の田村です。」

小西 「梶原さん、どうしたんですか？」

署長 「ちよっと遅れるって。」

小西 「そうですか」

田村 「…まあ、とりあえず始めましょうか。」

小西 「どうぞ。」

田村 「まず、小西さんが今回の件に関わることになったきっかけからお伺いしたいのですが。」

小西 「…はい。」

小西、返事はするが、なかなか言葉が出ない。

スーツのスカートの裾の布地を縮めたり伸ばしたりしている。

田村 「思い出せませんか？」

小西 「いえ…。あの…。」

署長 「ゆっくりでいいんだよ。」

小西 「…はい。」

田村 「根本幸に会ったのはいつごろですか？」

回想エリアAに根本幸が現れる。

微笑みながら、美幸の手を引いている。

しゃがみこんで美幸の視線に降りる。

小西の視線が幸に引き寄せられる。

幸、小西の視線に気づき、振り返る。

厳しい表情で、小西を見つめる幸。

幸の唇が開く。

田村 「小西さん？大丈夫ですか？」

小西 「ちよっと気分が悪くて。」

田村 「え？」

小西 「あのお手洗いに。」

田村 「君。」

佐々木 「こちらに。」

小西 「…。」

小西、佐々木に支えられ出て行く。

田村、ドアのそばで見送るが、

田村 「署長、やっぱり何かありますね。」

署長 「ああ。」

バタバタと足音。

梶原がやって来る。

梶原 「すみません。遅くなりました。」

署長 「おはよう。」

梶原 「おはようございます。」

梶原 「こんなイベントの日に抜けてていいんですか？」

署長 「いやー、ちよっと気になっちゃってます。」

梶原 「疼いちゃったすね、例の。」

署長 「そうそう。」

田村 「疼くんすか。」

署長 「小西さんよろしく頼むよ。」
梶原 「へいへい。」
田村 「なんすかなんすか。何が疼くんすか。」
梶原 「うるせえな。で、小西…さんは？」
田村 「なんか気分悪くなったみたいで。」
田村 「なんかあるんすかね。トラウマ的な？」
梶原 「いやいや、そんな玉じゃねえよ。」

小西、戻ってきている。

小西 「随分な言い草ね。」
梶原 「久しぶり…でもないか。」
小西 「逃げたのかと思った。」
梶原 「オレが？」
小西 「いつも居留守使ってたじゃない。」
梶原 「どうせまた養育権がどうのつて。」
小西 「そんなんじゃない。」
梶原 「なんだよ。」
小西 「もういい。手遅れだから。」
梶原 「根本か。」

小西、肯く。

梶原 「なにがあつた？」
小西 「…。」
梶原 「なんだよ、はっきりしねえなあ。」
小西 「…。」
梶原 「どうしたんだよ、あんたらしくもない。」
署長 「まあまあ。そう急ぐもんじゃない。」
梶原 「はあ。」
署長 「とりあえず座ろうよ。」
小西 「はい。」

小西、署長に促され椅子に掛ける。

田村、ため息をつき、

田村 「始めていいですか？」
梶原 「おお。」

田村、梶原、椅子に座る。
署長それを見守っている。

田村 「えっと、根本とはいづくくらいから？」
小西 「…二年前くらいから。近隣の方からちよくちよく通報があつて。」
田村 「なるほど。」
小西 「それで、様子を見に行くようになって。」

回想エリアAに明かり。
幸が美幸の手を引いている。
手をつないでいるのに、幸は全く美幸の方を見ようとしない。
小西、その様子を慎重に見ながら、明るく話しかける。

小西 「根本…幸さん？」
幸、美幸の手を少し強引に引っ張って家の中に去る。
ドアの音が響く。

小西 「最初から、なんかうまくいかなかった。」
梶原 「どうせまた高圧的に決めつけたんだろ。」
小西 「そんなことしてない。」
梶原 「そうか？うち来た時相当やな感じだったぜ。」
小西 「…。仕事だから。」
梶原 「仕事ねえ。」
小西 「仕事だから、親御さんとぶつかることもある。」
梶原 「それが相手を追い詰めることだってあるんじゃないかよ。」
小西 「…！」
梶原 「何とかできなかったのか。」
小西 「しようとした。」
梶原 「結果これじゃあ何にもなんねえだろ。」
小西 「そんなことわかってる。…わかってる…。」

小西、俯き、スーツの裾を引っ張る。

署長 「マスコミの連中、来ただろ。」

小西 「…はい。」

署長 「大変だったんじゃない？」

小西 「また行政が出遅れたせいで尊い犠牲がって。」

署長 「そう。」

小西 「わかったようなこと言っちゃって。」

小西、強がったように笑おうとするがその笑いは中途半端に終わる。

小西、俯く。手が震えている。

梶原、それをしばらく見ている。

梶原 「昨日、上村先生が来たよ。Q 小学校の。」

小西 「ああ。」

梶原 「根本に会いたって言ったんだ。」

小西 「え？」

梶原 「先生、謝ったんだよ。自分のせいだって。根本、それ聞いて逆上してな。」

小西 「逆上？」

梶原 「お前が美幸を殺したんだって。」

小西 「なんで？」

梶原 「あなたの方が心当たりあるんじゃないかねえのか。」

小西 「…。」

梶原 「みんなで娘を取り上げようとしたって叫んでたよ。」

小西 「私たちが殺したんじゃない。私たちがって、精いっぱいやった。私たちは…悪くない。」

沈黙。

梶原 「そうだよな。あんたたちは悪くないかもしれない。」

小西 「…。」

梶原 「でも、聞こえちゃうんだよな、親にはさ、周囲の助言とかそんなものが。本当に追いつめられてるとな。」

小西 「でも、それは…！」

小西 「俺、手を上げちゃったからな、翔太に。」

小西 「…！」

梶原 「あんたが来た時。だからわかるんだ。初めてひっぱたいた。全然自分が止められな

くて…。ひっぱたいた方が痛えんだ。忘れらんねえ。

その時近所の奴らが通報したんだろ。」

署長 「それで小西さんが署に来たんだったよね。」

小西 「…はい。」

梶原 「…自分が親失格だつて言われてるようで、な。」

小西 「そんな…。」

梶原 「…子供を取り上げられちまうような気になっちまって。」

小西 「私は…。」

梶原 「根本ともなんかあったんじゃねえのか。」

小西 「…。」

梶原 「どうなんだ。」

小西 「私は、悪くない。」

梶原 「誰もそんなこと…。」

小西 「私が悪いんじゃない。」

小西、机に突っ伏す。

そんな小西をしばらく見やる三人。

署長が小西の肩に手を置く。

署長 「小西さん。」

小西 「…はい。」

署長 「いやだろ、こんなこと。」

小西 「…。」

署長 「何の罪もない子供たちが大人のエゴで死んでいく。こんなこと、本当に厭だよね。」

小西 「…はい。」

署長 「誰が悪かったかなんて関係ないんだよ。本当は。ただ私たちは知らなくちゃいけないんだ。何があったのか。もう繰り返さないために。ね。」

小西 「…。」

署長 「だから、小西さん、協力してくれないかな。」

小西 「…はい。」

小西、姿勢を正して座り直す。

田村 「続けていいですか？」

小西 「はい。お願いします。」

田村 「根本と何があったんですか？」

小西 「先ほどもお話しましたが、二年前くらいからマンションの住民から通報が入るようになって。」

田村 「具体的にはどんな。」

小西 「大声で子供を叱ってる声が聞こえるとか。美幸ちゃんが夜中に徘徊しているのを見たとか。」

田村 「なるほど。」

小西 「随分と痩せているとか、痣があるのを見たとかっていう話もあった。」

田村 「死亡時の体重は、16キロ。」

小西 「4歳児の平均体重…。」

梶原 「ひでえもんだ。」

小西 「…。」

梶原 「そりゃあまあ、保護観察の対象になるわな。」

小西 「ええ。」

田村 「それで？」

小西 「調べてみると、幼稚園も辞めてしまっていて。」

田村 「それはどうして？」

小西 「保育料が滞納されていたようです。半ば辞めさせられた形で。」

梶原 「保育所は？」

小西 「空気がなかったみたい。」

署長 「なかなか大変だったようだね。」

小西 「ええ。しょうがなくて、一人で留守番させていたのね。」

梶原 「何とかできなかつたのかよ。」

小西 「いろいろ考えた。私なりにアドバイスしようとして…。」

署長 「それが裏目に出た。」

小西 「はい。頑なにしてしまったようでした。」

回想エリアAに明かり。

幸が美幸の手を引いている。

手をつないでいるのに、幸は全く美幸の方を見ようとしない。

小西、その様子を慎重に見ながら、明るく話しかける。

小西 「根本さん？」

小西 「私は、R市の児童相談所の小西と言います。」

幸 「今忙しいんで。」

小西 「あ、ちよっとお話だけ。」

幸 「これから仕事なんで。」
小西 「数分で済むから。ね。」
幸 「…何ですか？」
小西 「何か困ってることないかなって。母子家庭、でしょ？いろいろ大変なんじゃないかなって。一人で子育てしてるんでしょ、だから何か助けてあげられることとかないかなって。」
幸 「…。」
小西 「大丈夫？」
幸 「大丈夫そうに見えます？」
小西 「いや、だから私たちが何かしてあげられることないかなって。」
幸 「…。」
小西 「何かない？」
幸 「…お金ください。」
小西 「え？」
幸 「この子と何不自由なく暮らしていけるだけのお金、今すぐください。」
小西 「あ、そういうのは、ちょっと。」
幸 「ですよね。」
小西 「生活、大変なんだ。」
幸 「…楽そうに見えます？」
小西 「そうよね。えっと、児童手当とかの手続きはちゃんと取ってる？
ちゃんと手続取ればそういうお金もきちんと…。」
幸 「いつ行くんですか？手続き。昼間も夜も働いてて、お休みもなくて、いつ行くんですか？市役所。手続き平日の昼間なんて時間どうやったら作れるんですか？」
小西 「でも、みんなちゃんとやってるよ。そういうこと。」
幸 「ちゃんと？」
小西 「時間作らなきゃ。」
幸 「…。」
小西 「大変だとは思っけど、根本さんだけじゃないから、一人で子育てしてる人。だから、ちゃんと…。」
幸 「小西さんでしたっけ。それ、コーチ？」
幸 幸、小西の持っているバッグを指す。
幸 「素敵ね。」
小西 「あ、有難う。」
幸 「ねえ、小西さん。あなた、結婚してないでしょ？」

小西 「…まあ。」

幸 「絶対にわからない。貴方みたいな人に、私のこと、絶対わからない。」

小西 「…。」

幸 「ほら、行くよ。」

幸、美幸の手を少し強引に引っ張って家の中に行く。

ドアの音が響く。

取り残された小西、しばらく肩に掛けたバッグを見て、ゆっくりと取調室に戻る。

小西 「それから何度か訪問を繰り返して。でも、なかなか会えることもなくなって。」

署長 「何が根本を頑なにしてしまったんだろう。」

小西 「何度も、考えたんですが、その時はわからなくて。」

田村 「その間被害者とは。」

小西 「ほとんど。」

署長 「昼間家に一人でいたんだよね。その子。それでも会えなかった？」

小西 「はい。家に行っても反応が無くて。いる気配はあったんですが。」

梶原 「根本に止められてたのかな。」

小西 「多分。」

梶原 「じゃあ、話したことなかったんだな。」

小西 「一度だけ。一昨年の秋ごろ。そろそろ就学児健診のハガキが届くころだから心配になって行って見たの。したらもう暗くなっているのに公園のブランコに乗っている子を見つけて。話しかけてみた。」

小西、回想エリアAへ。

夕暮れの公園。

美幸がブランコに乗っている。

小西 「こんばんは。」

美幸、逃げようとする。

小西慌てて、

小西 「根本美幸ちゃん？」

美幸、足を止めたようだ。

小西 「前にお母さんと話してたの、覚えてる？美幸ちゃんそろそろ小学校だなんて思って会いに来てみたの。お母さんは？」

美幸 「お仕事。」

小西 「そう。」

美幸 「…。」

小西 「そんな恰好で寒くない？」

美幸、肯く。

小西 「美幸ちゃん、一人でお留守番偉いね。寂しくないの？」

美幸、肯く。

小西 「そうか。偉いね。今度一年生になるんだもんね。」

美幸 「一年生？」

小西 「そうだよ。来年の春になったら、美幸ちゃん一年生になるんだよ。」

美幸 「小学校？」

小西 「そうだよ。小学校。」

美幸 「みゆも一年生になれるの？」

小西 「なれるなれる。もう少ししたら来年一年生になる子たちにお手紙が来てね。それで一回学校行って先生とお話したら美幸ちゃんも一年生になれるんだよ。」

美幸 「みゆにもお手紙来るかな？」

小西 「来るよ。」

美幸 「本当？」

小西 「うん。春になったら学校に行ってお友達もたくさんできるよ。」

美幸 「あ、でも、ママ、いって言うかな。」

小西 「大丈夫。みんな行くんだもん。ママだっていいって言うよ。」

美幸 「お友達、できる？」

小西 「うん。たくさんお友達できるよ。」

小西、振り返り美幸を気にしながら取り調べに戻る。

小西 「もうそろそろみんなコートを着ているっていうのに、薄い長袖のワンピース一枚で素足にかかをつぶした小さな運動靴を履いていました。」

お友達、できるって私に聞いて…その時初めてちよっただけ笑ってくれました。なの…。」

梶原 「上村先生のところにも行ったんだってな、就学児健診の日。一年生になれるって聞いたそうさ。」

小西 「知ってる。何度も自分を責めた。何とかできたんじゃないのかって。」

梶原 「…。」

小西 「…私のせいかもしれない。」

梶原 「え？」

小西 「本当は私のせいかもしれないの。美幸ちゃんが死んだの。」

沈黙。

小西 「一昨年の暮れ。様子を見に行ったの。」

小西、回想エリアAへ。

根本の自宅前。

小西 「根本さんいらっしやいますか。」

幸、出てくる。

小西 「根本さん、美幸ちゃんは？」

幸 「どういうつもり？余計なこと言ったでしょ？美幸に学校がどうのって勝手に。」

小西 「だってそれは…。」

幸 「勝手な真似しないでよ！」

小西 「根本さん、落ち着いて。」

幸 「美幸は学校には行きません。」

小西 「待つて根本さん、義務教育ですよ。親には子供を学校に行かせる義務がある。知ってますよね？」

幸 「義務？」

小西 「それにその方が貴女だって楽に」

幸 「美幸はどこにも行かない。」

小西 「でも、学校に行けばお友達もできて」

幸 「美幸はどこにもやらない。」

小西 「そんな美幸ちゃんだって。」

幸 「美幸ちゃんだって学校に行きたがってた。」

小西 「美幸が？」

幸 「そう。美幸ちゃんだってお友達が欲しいって、学校に行きたいって言った。」

幸 「嘘。」

小西 「嘘じゃない。そろそろ美幸ちゃんだってちゃんと一人で学校に行ったりお友達と遊んだりした方がいい。そのために私たちは」

幸 「ちゃんと？」

小西 「そう。ちゃんと。」

幸 「美幸？本当？美幸。」

幸、逆上しながら部屋に入ろうとする。

小西 「待って、根本さん。」

幸 「みゆ、本当に学校に行きたいって言ったの？まだわからないの？みゆはまだそんなところ行けやしないって。まだわからないの！」

小西 「落ち着いて、根本さん。」

幸 「帰って。」

小西 「根本さん。」

幸 「帰って！二度と来ないで。美幸を私から取り上げようって。そんなこと絶対させないから。美幸はどこにも行かせないんだから。」

小西 「根本さん。お願い聞いて。」

幸 「ちゃんとちゃんとして、本当嫌い。私だってちゃんと精いっぱいやってる！もう来ないで！」

小西の前でドアの閉まる音。

コンクリートの廊下に反響する。

小西ゆっくり取調室に戻る。

小西 「それから何度行っても家は留守で。しばらくは様子を見に行ってたんだけど。郵便物もたまる一方で。…近所に聞いても出て行ったらしいって。」

梶原 「それで放っておいたのか！」

小西 「私だって何とかしたかった！でも、根本さんから相談所にクレームが入ってしばらく近づくなくて上にも言われて…。」

署長 「引継ぎは？」

小西 「…人事異動と重なったりしてうやむやに。」

田村 「発見した日のことは？」

小西 「数日前、地区の所在不明児の調査があつてその中に…美幸ちゃんの名前があつた。」

辛い沈黙。

小西 「それで、根本さんの連絡先を探し出して連絡したら、私と上村先生に来てほしいって。見せたいものがあるからって。それで」

小西 「あの日は…。」

回想エリアに幸、現れる。無表情にドアを見ている。

ゆつくりと小西の方を向く。

小西と視線が合う。

小西、立ち上がる。視線は幸にくぎ付けのまま。

椅子がひっくり返る。

田村 「小西さん？」

小西 「あの日、根本さんが言ったの。」

小西・幸 「もうみゆはどこにも行けない。」

小西 「…私のせいなのかもしれない。」

沈黙。

梶原 「田村、ちょっと外してくんねえか。頼むよ。」

署長 「田村君、イベントどうなってるか、ついでに見てきておくれよ。」

田村 「じゃー行ってきました。」

署長 「頼んだよ。」

田村、出て行く。

署長 「ちよっとコーヒーでも飲まないか。」

梶原 「オレ、取ってきます。」

署長 「たのむよ。」

梶原、出て行く。

署長 「少し無駄話をしてもいいかな。」

小西 「…はい。」

署長 「年頃の娘がいるんだが、結婚したんだ。」

小西 「え？おめでとうございます。」

署長 「ああ、いいんだ。ちよつと複雑でね。いまだき珍しくもないだろうが、できちゃった結婚ってやつだ。最初聞いたときはもう頭にきてしまっただけでね。だってまだ二十歳にもならないんだよ、娘は。大学にも入ったばかりなのに何やってるんだってね。自分がちゃんとしてないくせに子どもなんて育てられるかってさ。」

小西 「心配、ですよね。」

署長 「ああ。親にしてみればまだまだ子供だ。心配で、ついね。」

署長 「そしたら娘が泣きながら言うんだよ。子供は親を選んで生まれてくるんだって。こんな私を選んでくれたんだから精一杯育てなきゃって。驚いてしまっただけ。」

小西 「…。」

署長 「まだまだ子供だと思っていたが…。」

小西 「しつかりした娘さんですね。」

署長 「いやいや、まだまだ危なっかしいんだけどね。」

二人少し笑う。

署長 「娘ね、不器用だけど一生懸命で、少し似てるんだよ、小西さんに。」

小西 「私に。」

署長 「そう。」

小西 「…幸せになってくれるといいですね。」

署長 「そうだね。本当にそう願うよ。でも、人間なんて愚かだからさ。いつまでたっても間違えてしまうときはある。」

小西 「…。」

署長 「せっかく選んで生まれてきてくれた子供を親が傷つけてしまったり、ね。」

小西 「…そうですね。」

署長 「だから、そんなときの為に我々がいるんじゃないかな。」

小西 「…。」

署長 「繰り返させないこと、そうだろ？」

小西 「…はい。」

ドアが開き、梶原。

署長 「梶原君、あと頼むよ。」

梶原 「え？コーヒー…。」

署長 「もらってくもらってく。じゃあね。小西さん。」

小西 「あ。ありがとうございます。」

署長 「またね。後でケイタ君見に来てよ。」

小西 「はい。必ず。」

署長、出て行く。

梶原、見送ってから、コーヒーを小西に渡す。

梶原 「ほら。」

小西 「ありがとう。」

梶原 「大変だったな。」

小西 「…ずっと自分を責めてた。」

梶原 「だろうな。」

小西 「うん。」

二人、コーヒーを飲む間。

小西 「梶原さんと、こんなに落ち着いて話せるようになるなんてね。」

梶原 「仕事中だからな。」

小西 「ああ、そうね。」

コーヒーを飲む間。

小西 「離婚、どうなった？まだもめてるの？」

梶原 「子供の取り合いってやつだ。」

小西 「まだガンバってるんだ。」

梶原 「ああ。…でも…最近ちょっと考えてる。限界かもなって。」

小西 「そう。」

梶原 「この前、留守中に高熱出されちゃって。もう落ち着いたけど。でも、正直応えた。…気づいてやれなかった。」

小西 「そう…。」

コーヒーを飲む間。

小西 「うちの親がね。離婚したの。本当今更なんだけど。熟年離婚て奴？」

梶原 「そうか。」

小西 「教師だったからね。両親。いつもちゃんとしろちゃんとしろって言われて育ててきたのに、今更両親の方が離婚なんて、本当笑える。」

梶原 「そうだな。」

小西 「ちゃんとしろちゃんとしろって、それが口癖になっちゃって、いつの間にか人を決めつけるようなことまで言っちゃって。」

間

小西 「私、来週で辞めるの。今回の件で。マスコミに相当叩かれちゃったからね。」

梶原 「だからって責任なんて。」

小西 「いいの。ちょっといろいろ考えてみたいし。」

梶原 「そうか。」

小西 「私は私でできること探してみる。」

梶原 「前向きだな。」

小西 「似てるんだって、署長さんの娘さんに。」

梶原 「美里ちゃん？」

小西 「不器用で一生懸命なところが。」

梶原 「そうか。」

ドアにノックの音。

田村 「もういいすか。」

梶原 「おう。どうだ、あっち。」

田村 「なんかケイタ君大人気で。」

小西 「なんかすみませんでした。」

田村 「いえ全然す。」

梶原 「田村、小西さんそろそろ。」

田村 「ああ、ありがとうございます。」

小西 「いえ。また何かあったらいつでも。」

梶原 「ああ。」

田村 「オレ、送ってきます。」

梶原 「頼む。」

小西、振り返り梶原に手を振る。

梶原も軽く手を挙げる。

小西、田村と出ていく。

田村 「署長が寄ってってくれて言っていましたよ。」

二人の足音が遠ざかる。

梶原、ため息をつきながら机に腰掛ける。

ポケットのスマホがバイブ。

取り出し、眺める。

コーヒーの紙コップを口に運ぶが中身はもう残っていなかったようだ。

紙コップを重ね、屑籠に落とす。

足音が近づいて来る。

静かで礼儀正しいノックの音。

梶原 「はい？」

佐々木 「あの失礼します。」

梶原 「なに？」

佐々木 「面会の方が。」

梶原 「だれ？」

佐々木 「神宮寺さんと仰っていらっしやいました。」

梶原 「ああ。わかった。お通しして。」

ドアの外に神宮寺。

佐々木 「どうぞ。」

神宮寺 「ああ、有難う。」

梶原 「わざわざご足労いただきまして。」

神宮寺 「すごい賑わいですね。」

梶原 「やあ、まあ。佐々木さん、田村呼んできて。」

佐々木 「はい。」

佐々木、出て行く。

梶原 「あ、どうぞ。」

神宮寺 「有難う。」

梶原 「何かお飲みになりますか？」

神宮寺 「いえ、お構いなく。」

二人、椅子に掛ける。

神宮寺 「幸は…どうですか？あ、別に他意はないですよ。どうしてるのかなと。」

梶原 「いや、なかなか。」

神宮寺 「そうでしょうね。」

梶原 「予想通り、ですか？」

神宮寺 「いえいえ。ただ、彼女の悪いところだ。すぐに攻撃的になる。それに頑なだ。」

梶原 「確かに。」

沈黙。

梶原 「遅いなあ。あー、すみません、お待たせしちゃって。」

神宮寺 「皆さんお忙しそうでしたから。本当にお気遣い無く。」

梶原 「恐縮です。」

沈黙。

じつと梶原を見つめている神宮寺。

居心地の悪い梶原。

神宮寺 「昨夜はよくお眠りになられたようですね。」

梶原 「え？ああ。久しぶりに熟睡したようで、気づいたら朝でした。」

神宮寺 「そう。それは良かった。」

神宮寺、薄く笑って、

神宮寺 「顔色が随分といい。」

梶原 「そうですか？」

神宮寺 「ええ。」

静かな沈黙。

神宮寺はじつと梶原を見つめている。

居心地の悪い梶原。

靴音、ドアが開き、田村。

田村 「どうもどうも、お待たせしちゃって。」

梶原 「遅いよ。」

田村 「いやー、だって人がすごいんですよ。暇なんすかね。みんなもつと遠くに出掛けたらいいのに。」

神宮寺 「初めまして。田村さんかな？何度もご連絡いただいてすみません。」

田村 「あー、いや、こちらこそ。」

梶原 「じゃあ、始めるか。」

田村 「お名前と年齢をお願いします。」

神宮寺 「神宮寺良徳。四十八歳。精神分析医です。」

田村 「根本幸とはいっ頃から？」

神宮寺 「一昨年の十一月頃ですね。あの頃ちょうど地元のタウン誌に無料相談のお知らせを掲載してもらっていて、そこに彼女が電話をくれて。」

田村 「根本にお逢いになりますか？」

神宮寺 「…幸にはもう私は必要ありません。」

梶原 「それはどういう？」

神宮寺 「幸の望んだとおり、もう彼女は母親ではないんですから。」

梶原 「子供を見殺しにしてですか？」

沈黙。

神宮寺 「彼女の…子供時代の話は？」

田村 「あ、確か母子家庭だとか。」

回想エリアに幸。

遊んでいる美幸をじっと見ている。

貼りついたような笑顔。

神宮寺 「彼女の母親は…まあもう再婚もしていて連絡も取っていないらしいですが、前は学校の先生をしていたらしくてね。職業柄か、教育熱心だったようです。幼い頃はただ父親も一緒に居てね。寂しいこともあったけど、幸せではあったようです。」

梶原 「父親は？」

神宮寺 「彼女が中学時代、他に女性を作って出て行ったと聞いています。それから彼女の生活は一変した。」

幸の表情が歪む。

幸 「みゆ、何してるの！ほら早くしなさい！なんでこんなことさっさとできないの？全く何をやらせても不器用なんだから。」

幸 「あー、またこんなに散らかして。ちゃんと片づけなさいって言ってるじゃない！どうしてできないの！」

神宮寺 「夫の裏切りが、母親の価値観を変えてしまったのでしょね。それから、幸に対する態度が次第に変わっていったと聞きました。」

幸 「みゆ、何してんの！全くバカなんだから、そんなんだから」

幸・神宮寺 「あんたがそんなんだからお父さんは出て行ったんだよ！」

神宮寺 「何度も、そうなのしられたと言っていました。」

梶原 「…。」

神宮寺 「幸は、ずっとなろうとしていた。良い娘良い妻良い母親。そしてその都度挫折して苦しんでいた。」

私は幸を救い出してあげたかった。」

梶原 「それがこの結果ですか？」

神宮寺 「では、貴方はあのまま彼女が価値観に縛り付けられ、犠牲になっていればよかったと？」

梶原 「だからって誰かを犠牲にしていわけじゃない！」

神宮寺 「では、貴方は？貴方は誰も犠牲にしないと言い切れるのですか？」

梶原 「…。」

神宮寺 「刑事さん、ご家族は？」

梶原 「…。息子が一人。」

神宮寺 「奥様は？」

回想エリアに明かり。

静香、俯いている。

梶原 「いない。出た。」

神宮寺 「そうですか？」

梶原 「それがどうかしましたか！」

神宮寺 「貴方にとって奥様はなんでしたか？」

梶原 「え？」

神宮寺 「恋人？妻？母親？」

梶原 「それは？」

神宮寺 「奥様をちゃんと一人の人間として見てましたか？」

静香 「私、今日一日、翔太としか話してないんだよ。」

梶原 「…。」

神宮寺 「自分勝手な役割を一方的に押し付けていませんか？」

梶原 「(棒読みで) 母親だろ？勘弁してくれよ、本当。」

静香、悲しげな顔で去る。

神宮寺 「それは誰かを犠牲にしていたことになりませんか？」

梶原 「…詭弁だ。」

神宮寺 「そうかもしれない。でも私は助けたいと思った。」

梶原 「それが誰かを傷つけてもか。」

神宮寺 「はい。」

梶原 「…。」

神宮寺 「何故なら本人も周囲に傷つけられていたから。」

梶原 「だからって、子供を傷つけていいなんてこと…。」

神宮寺 「貴方は？」

梶原 「え？」

神宮寺 「貴方は絶対に子供を傷つけていないって、言いえますか？」

梶原 「それは…。」

神宮寺 「自分の気持ちばかりを押し付けたり、聞いてあげなかったり、手を上げたりしていいと言いきれますか？」

梶原 「だからってこれは！」

神宮寺 「…遅かれ早かれ同じことが起こっていた。」

梶原 「どういうことだ？」

神宮寺 「幸は限界でした。」

梶原 「限界だ？そんな事…。」

神宮寺 「刑事さん、幸は夢を見ると言っていました。自分が娘の命を奪う夢。」

回想エリア。

幸が電話をかけている。

神宮寺 「もしもし。」

幸 「あの…この前広告が。電話で相談に乗ってもらえるって…。」

神宮寺 「はい。いいですよ。」

幸 「…あの、お金とかないんで…。」

神宮寺 「大丈夫。心配しなくていいですよ。」

幸 「本当ですか？」

神宮寺 「大丈夫。何か心配事？」

幸 「あの…夢を見るんです。」

神宮寺 「そう。どんな夢か話してくれますか？」

幸 「あの…嫌な夢なんです。とても…すごく怖くて…。」

神宮寺 「どんなふうにも。」

幸 「…。」

神宮寺 「…話してくれませんか？」

幸 「信用していいんですか？」

神宮寺 「大丈夫だと思いますよ。」

幸 「本当に？」

神宮寺 「本当に。」

幸、ぎこちなく微笑む。

神宮寺 「私は、幸を救いたかった。」

梶原 「…。」

神宮寺 「それだけだったんです…。」

梶原、神宮寺を見つめる。

ゆっくりと暗くなる。

明るくなると、神宮寺の座っていた椅子に幸。

取り調べが始まっている。

回想エリアに神宮寺、その情景を観察するように見つめている。

幸 「面会、ありませんか？」

梶原 「神宮寺か。」

幸 「はい。」

梶原 「さっき来た。」

幸 「え？じゃあ。」

梶原 「帰ったよ。」
幸 「私に会いに来てくれたんじゃないんですか？」
梶原 「もうあんたに会う必要はないって言った。」
幸 「嘘！」
梶原 「嘘じゃない。」
幸 「…そんなはずない。先生が私を見捨てるはずがない。あんた嘘ついてるんでしょ！」
梶原 「嘘ついて何になるってんだ。本人がさっき来て言ったんだ。あんたには、もう自分
は必要ないってな。」
幸 「必要ないってどういう意味？」
梶原 「あの人がそう言ったんだ。」
幸 「嘘だ！先生、先生！」
梶原 「根本、落ち着け！」
幸 「そんな…先生だけは私のことわかってくれてたのに…。信じてたのに…。」

沈黙。

田村 「上村先生覚えてる？Q小学校の。」
幸 「…。」
田村 「児童相談所の小西さんも。」
幸 「…。」
田村 「みんな、何とかしてあげたかったって言った。」
幸 「何とかって何ですか？全然わかんない。」
田村 「…なんでそんなに美幸ちゃんのこと学校に行かせたくなかったの？」
幸 「…だってまたみんなでちゃんとしなさいって言うじゃないですか。」
田村 「みんなって？」
幸 「もつとこうした方がいいんじゃない？とか、大丈夫？とか、もつとちゃんとちゃん
ととか、言うじゃないですか。」
田村 「それは、みんな心配して…。」
幸 「心配？みゆが、私がちゃんとできないから？」
田村 「いや、そうじゃなくて。」
幸 「口先ばっかで、本当ムカつく。」
梶原 「なんだよ、その態度！みんな、あんたを責めてたわけじゃねえんだぞ。」
幸 「じゃあ、私が悪かったって言うの？」
梶原 「だから、そうじゃねえって。」
幸 「私は悪くない。みゆはいつまでたつても頼りなくて。まだ何にもできなくて。あの
まま学校に行かせたら、また何言われるかわからないでしょう！学校になんか学

校になんか行かせられない！」

梶原 「だから、閉じ込めたのか？だから、美幸ちゃんを閉じ込めて殺したのか？」

幸 「…どんなに私が辛かったか、わからないでしょ！」

梶原 「そんなの言い訳になるか！美幸ちゃん死んでるんだぞ！」

幸 「美幸は私の娘です！どうしようと親の勝手じゃない！」

梶原 「なに言ってるんだ、手前！そんなの、親じゃねえだろ！」

田村 「まあまあ梶さんも。」

梶原 「すまん。」

田村 「根本さん、根本さんの娘かもしれないけど、美幸ちゃんだって一人の人間でしょ。」

幸 「…。」

田村 「違う？」

幸 「…。刑事さん、ご家族は？」

田村 「いないよ。まだ独身で。」

幸 「そうですね。じゃあ、私の気持ちなんてわかるわけないですね。絶対わからない！」

田村 「…わかんないね。うち父子家庭だったから。」

梶原 「お前…。家族居ないって。」

田村 「もういない、誰も。天涯孤独ってやつです。（幸に）おやじ、男手一つでオレを大
学まで行かせてくれちゃったからねー。無理してたんだと思うよ。急にポックリ逝
っちゃってさ。」

梶原 「…。」

田村 「オレもできなんてちつとも良くなかったけどね、でも、おやじはオレを見捨てな
かった。」

幸 「…。」

田村 「だから、オレには子供を見殺しにしたあんたの気持ちなんてほんと到底わからない
んだよねー。悪いんだけどー！」

幸 「…見殺しにしたんじゃない。」

梶原 「そうだな。見捨てたんだ。」

幸 「違う…。」

梶原 「違わない！見捨てて殺したんだ。」

幸 「違う！あのままじゃ、私、本当にみゆのこと、みゆのこと、傷つけてしまいそうだ
ったから！」

幸、電話をかけているらしい。相手は神宮寺。

幸 「私、みゆを傷つけてしまうかもしれない…。」

幸 「はい。」

幸 「まだ…まだないです。」

幸 「でも、毎晩夢を見て…。生々しい感触が残ってて…。」

幸 「手が…まだみゆの血で汚れてる気がする。」

幸 「何度も目が覚めて、隣で寝ているみゆの鼓動を確認して、また夢を見て、目が覚めて…。」

幸 「今は、夢だけ…。」

幸 「お願いします。助けてください。このままじゃ、このままじゃ私…。」

幸 「仕事に追われて、疲れて、家事とか育児とかちゃんとしたのにできなくて、みゆにも何にもしてあげられなくて、そんなとき、近所のお母さんに言われたんです。『みゆきちゃんももう少しちゃんとしてあげないと学校行けないんじゃない』って。それからしばらくして小西さんが来て」

回想エリアに小西が現れる。

小西 「根本さん？何か困ってることないかなって。」

小西 「母子家庭、でしょ？いろいろ大変なんじゃないかって。」

小西 「一人で子育てしてるんでしょ、だから何か助けてあげられることとかないかなって。」

小西 「大丈夫？」

幸 「近所の誰かがきつと告げ口したんだろうって思った。みゆがちゃんとしてないから。それから、もっとちゃんとしなくちゃって頑張ったのに、でも、みゆ何も出来なくてそのうち市から就学児健診のお知らせが来ちゃって、どうしていいかわからなくて。そしたらまた小西さんが来て。」

小西 「美幸ちゃんだって学校に行きたがってた。」

小西 「美幸ちゃんだってお友達が欲しいって、学校に行きたいって言った。」

小西 「美幸ちゃんだってちゃんと一人で学校に行ったりお友達と遊んだりした方がいい。」

幸 「みゆが学校に行きたがってる、友達を欲しがってるって聞いて、みゆも私の知らないところに行っちゃうんだなって、私、また捨てられてしまった気がした。でも、その後しばらくみゆが風邪をひいて熱も高くて、その時思ったんです。そうか、みゆは体が悪いから、ここから出て行けないんだって。焦らなくていいんだって。いつか、みゆが良くなったら、新しいランドセル買ってあげて、二人で桜の下を歩こうって。それなのに…。」

回想。入学式当日の日の夕暮れ時。

公園で遊ぶ子供の声。

ドアの前に、袋に入った教科書と、入学式の紅白まんじゅうを持った上村。

ドアのチャイムを鳴らそうとする。

不意に人影。

幸。

飛び出してきて、ドアの前に立ちふさがる。

幸 「何の用ですか？」

遠くから遮断機の音。

上村 「あの。」

幸 「何か用ですか？」

上村 「僕、今度美幸さんの担任になった…。」

幸 「美幸は学校へは行きません。」

上村 「え？あの…？」

幸 「美幸は、まだ学校へは行きません。」

上村 「あ、体調とか…？」

幸、頑なな表情で肯く。

上村 「そうですか。」

幸 「躰が弱いんです。」

上村 「あの、お医者さんへは？」

幸、肯く。

上村 「そうですか…。」

幸 「…。」

上村 「残念ですね。美幸さん、学校に来るのを楽しみにしてたのに。」

幸、表情が変わる。

幸 「なんで。」

上村 「え？」

幸 「みゆと、どこで…。」

上村 「就学児健診の」

幸 「ダメだって言ったのに！」

上村 「え？あの。」

幸 「放って置いてください！」

上村 「あ、お母さん。」

幸 「お母さん？」

上村 「え？あの」

幸 「なれなれしく呼ばないでよ！」

上村 「あの、僕はただこれを美幸さんに」

幸、黙って上村の持っているものをひったくるように受け取る。

上村 「あの、お大事に。」

幸、黙ってドアの鍵を開けようとする。

慌てていてなかなか開かない。

上村 「早く学校に来てねって伝えてください。」

ドアがようやく開き、幸が慌てて部屋に入る。

上村の前でドアが音を立てて閉まり、その音がコンクリートの壁に重く響く。

幸 「桜が咲いてて…。みんなと一緒に新しいランドセル買ってあげたいなって…。でも、そんな日来るわけなかった。」

沈黙。

梶原 「美幸ちゃんは、いつ死んだんだ。」

沈黙。

梶原 「美幸ちゃんが最後に言ってた言葉、思い出せるか？」

幸 「…。」

梶原 「そんなお前に、娘はなんて言っただって聞いているんだ！」

幸 「美幸…？」

梶原 「そうだ。娘だよ。美幸ちゃんだ。お前の娘だろ？」

幸 「…美幸は…。」

沈黙。

梶原 「なんでお前は自分のことばかり、自分の話ばかりしてんだ！なんで娘の言葉を聞いてやれなかったんだ！お前、親だろうがよ！」

幸 「…。」

田村 「上村先生が言ってたよ。美幸ちゃん、学校に来た日先生に聞いたって。『みゆも一年生になれる？』って。」

幸 「…。」

梶原 「小西さんも言ってた。学校、楽しみにしてたって。そんな娘の当たり前前の想いを、お前は自分の勝手な気持ちで踏みつけにしたんだぞ！」

幸 「私だって！」

梶原 「辛かった、苦しかった。でもそれは、娘も同じだったんじゃないかよ！」

幸 「…。」

梶原 「神宮寺さんが母親だって人間だって言ってた。確かにそうかもしれないねえよ。じゃあ、なんで考えてやれなかったんだよ！娘だって美幸ちゃんだって一人の人間だったんだ！」

沈黙。

幸 「…小学校の先生が来た日、ついみゆに手を上げて、自分が止まらなくなりそうで怖くて、先生に電話したら、すぐに来ていいって言うてくれて。しばらくして帰ったら、もう…みゆは動かなくなってた。」

田村 「死んでたの？」

幸 「わかりません。」

田村 「…。」

幸 「確かめるのも怖くて、みゆの好きだった菓子パンを枕元に置いて、鍵をかけたけど不安で、誰もみゆを連れ出せないようにドアとか窓ににガムテープを張って、また先生の所に行きました。」

沈黙。

幸 「…最後に話した言葉、思い出した…。」

梶原 「…。」

幸 「…みゆは学校に行くの？学校に行きたいの？そう聞いたら、小さい声で、ママごめんなさいって…。ママが泣くなら、みゆは学校行かないよって…。」

幸、泣き崩れる。

刑事二人、頷きあう。

田村が促し、佐々木が立ち上がり、幸を連れていく。

梶原は俯いたまま椅子に掛けている。

梶原、自分の手をじっと見ている。

しばらくして、田村が戻ってくる。

田村 「なんか大変でしたね。」

梶原 「ああ。」

沈黙。

田村 「…ほらほら、取りましようよ、コミュニケーション。」

梶原 「…無理だ。」

田村 「えー、冷たいなあ。」

梶原 「無理なんだ、オレには。」

田村 「梶さん。」

梶原 「子供だって一人の人間だなんて…よく言えたもんだよな。笑っちゃまうよ。自分のガ

キとちやんと向き合えなかったのは…オレなのに…。」

田村 「梶さん。」

梶原 「…自分の家族なのに…。根本と何にも変わりやしねえんだ、俺は…。」

田村 「…なんすかね、不器用なんすよね、きつと。」

梶原 「んだよ、お前に云われたかねえよ。」

田村 「本当取れないんすよね、コミュニケーション。」

梶原 「自分のことかよ。何とかなんねえのかその性格。」

田村 「ならないす。どーにもなんないすよ。なんてったってオレ、入学式の日、親父が来

たいって言ったの、断ったんすよ。うざいって。なんか、大学の入学式に保護者付

きなんて照れくさくって。

あんなに喜んでくれてたのに何言っちゃってたんすかねー。で、その次の日おやじ

職場で倒れてそのまま…。」

梶原 「…。」

田村 「今思えば、必死に働いてくれてたんすよね。こんなオレのために。本当バツカなん

すよね、昔っから。」

梶原 「…。」

田村 「…。」

梶原 「いいコンビだな。」

田村 「え？なんすか。」

梶原 「いいコンビかもな、オレたち。」

田村 「なんすかなんすか、梶さん、ちよっとキモイすよ。」

梶原 「うるせえ。」

あー、外は？」

田村 「ようやく、落ち着いたみたいす。」

梶原 「そうか。」

田村 「結局喋らなかつたすけどね。ケイタ君。」

沈黙。

田村 「ねえ、梶さん、鸚鵡語ってどんなですかね？」

梶原 「わかんねえよ。そんなもん。」

田村 「そうか。じゃあ、ケイタ君もしゃべりっこないですね。俺らの言葉。分りっこない
ですもんね。」

梶原 「…。」

田村 「なんで署長もケイタ君の言葉で話しかけないんすかね。」

梶原 「…そうだな。」

梶原 「なあ、田村。」
田村 「はい。」
梶原 「神宮寺に、根本と同じ眼をしてるって言われたよ。」
田村 「梶さんが？」
梶原 「ああ。」
田村 「なんすかね、それ。」
梶原 「限界なんだと思う。俺も。」
田村 「…。」
梶原 「翔太、やっぱり静香のところにいかせようと思ってる。」
田村 「…。」
梶原 「夜中に抜け出して電話してるくらいだもんな。恋しかったんだよな。母親。」
田村 「…。」
梶原 「ずっと、意地張ってたけど、やっぱりだめなんだよな。それじゃあ。翔太の気持ちも考えないと…。心配かけて悪かったな。」
田村 「…。」
梶原 「じゃあ、俺、先上がるわ。お疲れ。報告書頼んだぞ。」
田村 「お疲れ様です。」

梶原、出て行く。

田村、しばらく、その後ろ姿を見送る。

ゆっくりと暗くなっていく。

エピソード

五月六日

取調室に梶原と静香。

静香、大きなポストンバッグ。

静香 「翔太、来なくて。おばあちゃんというって。」

梶原 「そうか。」

静香 「じゃあこれで。」

梶原 「残りのものはまた落ち着いたら送るわ。」

静香 「あ、何なら、私行くよ。」

梶原 「あ、大丈夫。」

静香 「運動会とか、また知らせるから、良かったら。」

梶原 「ああ。」

静香 「…なんか、あれから考えた。いつから間違っちゃったのかなって。」

梶原 「…。」

静香 「お互い、相手の言葉が届かなくなってたなって。」

梶原 「…そうだな。」

静香 「また連絡する。」

梶原 「わかった。」

静香 「あ。そうだ。これ。」

梶原 「なに？」

静香、バッグの中から畳んだ画用紙。

静香 「手紙だって。翔太が。」

梶原 「手紙？」

梶原、机に腰掛け、手紙を開く。

大きなつたない字で。パパ大好き of 文字。

そして、家の中、笑いながら手をつなぐ梶原と翔太の絵。

足元には不格好なおにぎり。

ずっとそれを見つめる梶原。

静香 「じゃあね。うたた寝、ダメだよ。風邪ひく。」

梶原 「…ああ。」

静香 「もう若くないんだからね。」

静香、出て行こうとする。

梶原 「なあ。」

静香 「なに？」

梶原 「一つだけわがまま言っていていいか。」

静香 「…いいよ。なに？」

梶原 「…翔太のランドセル、俺が買ってやってもいいか？」

静香 「…わかった。」

梶原 「有難う。」

静香 「カッコイイの期待してる。」

梶原 「任せとけ。」

静香 「じゃあ。」

静香、出ていく。

しばらく画用紙を見つめる梶原。

足音。

田村が入ってくる。

田村 「梶さんこんなところにいたんすか。大ニュース、大ニュースすよ。今日ね、話しましたよ。ケイタ君。言えましたよ、自分の名前。」

梶原 「なんだよ。それ。」

田村 「間に合わなかったっすけどね、子供の日。」

梶原、どこかすっきりした顔で笑っている。

田村 「でも、いいじゃないすか。ね。」

梶原 「ああ。」

田村 「さあ、ポケットとしてないで、さっさと調書まとめちゃいませよ。」

梶原 「お前が仕切んなよ。」

田村 「えー、なんすかなんすかコミュニケーション。」

梶原 「取らねえよ。」

二人、取調室から出て行く。

ゆっくりと暗転。

暗転の闇の中、誰かの息遣い。

やがて幸の声が聞こえる。

小さな声 「ママ？ママ…。」

幸 「ねえ、私、今日誰とも話してないんだよ。」

END